

北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生学部入試の実施と合格者の発表
北海道大学COI「食と健康の達人」拠点の岩見沢市における低出生体重児減の
プロジェクトで第3回日本オープンイノベーション大賞 日本学術会議会長賞を受賞
北海道ワイン教育研究拠点設置に向けた寄附講座「北海道ワインのヌーヴェルヴァーグ研究室」を開設



全学ニュース

- 1 北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生（学部）入試の実施と合格者の発表
- 4 北海道大学COI『食と健康の達人』拠点の岩見沢市における低出生体重児減のプロジェクトで第3回日本オープンイノベーション大賞 日本学術会議会長賞を受賞
- 5 読売新聞北海道支社と包括連携協定を締結
- 6 災害用無線機設置・通信訓練を実施
- 7 災害等危機対策本部設置訓練を実施
- 8 Academic Fantasia 2月は池田貴子 特任助教（CoSTEP）が札幌日本大学高等学校の生徒に向けてオンライン講義を実施
- 9 北大フロンティア基金
- 11 令和2年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行政
- 12 総長と学生とのオンライン対話企画「寶金総長に伝えたい！」を開催
- 12 令和2年度小島三司奨学金受給者の決定
- 13 北海道との共催により「SDGs×北海道 交流セミナー2021」をオンライン開催
- 14 「SDGs×北海道 交流セミナー2021ポスターセッション」にDEMOLA HOKKAIDOが出席
- 15 DEMOLA HOKKAIDOの紹介動画・CMを制作
- 16 第3回ICReDD国際シンポジウムを開催
- 17 日本留学海外拠点連携推進事業サブサハラ拠点のロゴを作成
- 18 第3回日露産官学連携実務者会議を開催
- 20 本学寶金総長がモスクワ国立大学サドーヴニチ総長、新潟大学牛木学長とオンライン懇談を実施・2021年9月の日露大学協会総会開催方針について等合意
- 21 「次世代研究者のためのSDGsセミナー」を開催
- 22 博士人材と企業の情報交換会 第45回「赤い糸会（赤い糸ONLINE）」を開催



北海道との共催により「SDGs×北海道交流セミナー2021」をオンライン開催



DEMOLA HOKKAIDOの紹介動画・CMを制作



令和2年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行政



総長と学生とのオンライン対話企画「寶金総長に伝えたい！」を開催

部局ニュース

- 23 アイヌ・先住民研究センターFD「学生を指導する際に問題となるハラスメント」を開催
- 24 北海道大学学芸員リカレント教育プログラム（学芸リカプロ）報告会 プレゼンテーション+シンポジウム「ミュージアムの誕生と成長」
- 25 公共政策大学院が「創立15周年記念オンラインイベント・同窓会」を開催
- 26 令和3年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行政
- 27 北海道ワイン教育研究拠点設置に向けた寄附講座「北海道ワインのヌーヴェルヴァーグ研究室」を開設
- 28 観光学高等研究センターがオンライン公開講座「観光現場の挑戦」を開催
- 29 令和2年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催
- 30 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2020」を開催
- 30 寶金総長と先端生命科学研究院所属教職員との意見交換会を開催
- 31 寶金総長と理学研究院所属教職員との意見交換会を開催

定年を迎えるにあたって 32

諸会議の開催状況 40

人事 40



本学寶金総長がモスクワ国立大学サドーヴニチ総長、新潟大学牛木学長とオンライン懇談を実施・2021年9月の日露大学協会総会開催方針について等合意



博士人材と企業の情報交換会第45回「赤い糸会（赤い糸ONLINE）」を開催

表紙：読売新聞と北海道大学の協定（関連記事5頁に掲載）

裏表紙：キャンパス風景⑫ 事務局（北8条西5丁目）

■全学ニュース

北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生（学部）入試の実施と合格者の発表

令和3年度一般選抜の前期日程試験は2月25日（木）・26日（金）に、後期日程試験は3月12日（金）に実施しました。また、私費外国人留学生（学部）入試第2次選考は2月19日（金）に実施しました。各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者5,104名のうち、本学が指定した大学入学共通テストの受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者3名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象者は5,101名で、受験者は4,923名でした。

合格者は2,008名で、合格発表は、3月6日（土）午前9時に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が710名で全体の35.4%。卒業年度別では、令和3年3月高等学校卒業者が1,428名で全体の71.1%。また、男女別では女子が610名で全体の30.4%でした。

2. 後期日程

志願者3,517名について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象となった者は3,517名で、受験者は1,334名でした。

合格者は589名で、合格発表は、3月20日（土）午前9時に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が114名で全体の19.4%。卒業年度別では、令和3年3月高等学校卒業者が406名で全体の68.9%。また、男女別では女子が130名で全体の22.1%でした。

また、新型コロナウイルス感染症が疑われ体調不良により前期または後期日程試験を欠席した志願者に対し、3月22日（月）に追試験を予定していましたが、該当者がいなかったことから実施しませんでした。

3. 私費外国人留学生（学部）入試

私費外国人留学生（学部）入試の志願者は166名で、第1次選考の合格者は51名、第2次選考の受験者は44名、合格者は18名でした。

（学務部入試課）



令和3年度一般選抜（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
総合入試	文系	95	310 (106)	9 (3)	301 (103)	3.2	104 (40)		
	理系	数学重点選抜群	129	491 (64)	15 (0)	476 (64)	3.7	133 (17)	
		物理重点選抜群	233	573 (61)	16 (2)	557 (59)	2.4	239 (22)	
		化学重点選抜群	233	550 (129)	16 (7)	534 (122)	2.3	241 (54)	
		生物重点選抜群	175	425 (191)	16 (8)	409 (183)	2.3	179 (74)	
		総合科学選抜群	248	532 (167)	10 (3)	522 (164)	2.1	252 (80)	
学部別入試	文学部	118	360 (159)	12 (6)	348 (153)	2.9	126 (53)		
	教育学部	20	66 (33)	1 (1)	65 (32)	3.3	20 (9)		
	法学部	140	348 (113)	5 (0)	343 (113)	2.5	144 (43)		
	経済学部	140	333 (67)	7 (1)	326 (66)	2.3	145 (27)		
	医学部	医学科	101	338 (86)	28 (4)	310 (82)	3.1	101 (31)	
		保健学科	看護学専攻	63	119 (107)	6 (5)	113 (102)	1.8	65 (63)
			放射線技術科学専攻	28	78 (35)	4 (2)	74 (33)	2.6	29 (16)
			検査技術科学専攻	28	73 (55)	1 (1)	72 (54)	2.6	30 (25)
			理学療法学専攻	13	28 (7)	2 (1)	26 (6)	2.0	14 (3)
			作業療法学専攻	13	31 (16)	4 (1)	27 (15)	2.1	14 (9)
			歯学部	39	84 (27)	8 (4)	76 (23)	1.9	39 (11)
	獣医学部	20	88 (54)	3 (2)	85 (52)	4.3	22 (8)		
	水産学部	111	274 (72)	15 (6)	259 (66)	2.3	111 (25)		
	計	1,947	5,101 (1,549)	178 (57)	4,923 (1,492)	2.5	2,008 (610)		

※ () 内の数字は女子で内数

令和3年度一般選抜（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
学部別入試	文学部	37	293 (118)	188 (72)	105 (46)	2.8	43 (15)		
	教育学部	10	86 (30)	50 (19)	36 (11)	3.6	10 (4)		
	法学部	40	356 (104)	205 (57)	151 (47)	3.8	52 (21)		
	経済学部	20	171 (29)	125 (21)	46 (8)	2.3	32 (4)		
	理学部	数学科	13	118 (6)	67 (3)	51 (3)	3.9	13 (0)	
		物理学科	10	99 (10)	62 (7)	37 (3)	3.7	11 (1)	
		化学科	23	136 (17)	79 (12)	57 (5)	2.5	25 (3)	
		生物科学科 生物学専修分野	10	73 (24)	37 (13)	36 (11)	3.6	11 (2)	
		生物科学科 高分子機能学専修分野	5	46 (14)	24 (7)	22 (7)	4.4	5 (0)	
		地球惑星科学科	9	51 (12)	23 (4)	28 (8)	3.1	10 (1)	
	医学部	保健学科	放射線技術科学専攻	7	56 (23)	33 (15)	23 (8)	3.3	8 (2)
			検査技術科学専攻	7	58 (52)	44 (39)	14 (13)	2.0	8 (8)
			理学療法学専攻	4	30 (17)	19 (12)	11 (5)	2.8	5 (3)
	薬学部	24	193 (67)	126 (49)	67 (18)	2.8	30 (5)		
	工学部	応用理工系学科	38	170 (22)	110 (14)	60 (8)	1.6	44 (6)	
		情報エレクトロニクス学科	38	352 (22)	226 (16)	126 (6)	3.3	43 (3)	
		機械知能工学科	30	204 (12)	138 (9)	66 (3)	2.2	34 (1)	
		環境社会工学科	52	279 (51)	177 (34)	102 (17)	2.0	60 (6)	
	農学部	53	318 (110)	206 (73)	112 (37)	2.1	62 (17)		
獣医学部	15	80 (45)	40 (19)	40 (26)	2.7	15 (11)			
水産学部	50	348 (90)	204 (48)	144 (42)	2.9	68 (17)			
計	495	3,517 (875)	2,183 (543)	1,334 (332)	2.7	589 (130)			

※ () 内の数字は女子で内数

令和3年度私費外国人留学生（学部）入試合格者数等一覧

学部・学科等

学部・学科・専攻・コース等		志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
文学部	人文科学科	14	(7)	1	(0)	0	(0)	-	-
教育学部	教育学科	6	(2)	2	(1)	1	(0)	0	(0)
法学部	法学課程	5	(3)	2	(1)	2	(1)	2	(1)
経済学部	経済学科	7	(3)	2	(1)	1	(1)	1	(1)
	経営学科	14	(5)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
理学部	数学科	6	(2)	4	(2)	4	(2)	2	(0)
	物理学科	8	(2)	6	(2)	4	(1)	0	(0)
	化学科	2	(0)	0	(0)	-	-	-	-
	生物科学科	6	(3)	0	(0)	-	-	-	-
	(生物学専攻分野)	5	(3)	0	(0)	-	-	-	-
	(高分子機能学専攻分野)	1	(0)	0	(0)	-	-	-	-
	地球惑星科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
医学部	医学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	保健学科	3	(0)	3	(0)	3	(0)	0	(0)
	看護学専攻	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	放射線技術科学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	検査技術科学専攻	2	(0)	2	(0)	2	(0)	0	(0)
	理学療法学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	作業療法学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
歯学部	歯学科	2	(0)	0	(0)	-	-	-	-
薬学部	薬科学科	3	(1)	2	(1)	2	(1)	1	(0)
	薬学科	5	(3)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
工学部	応用理工系学科	10	(4)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	応用物理学コース	2	(1)	0	(0)	-	-	-	-
	応用化学コース	4	(2)	0	(0)	-	-	-	-
	応用マテリアル工学コース	4	(1)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	情報エレクトロニクス学科	35	(8)	12	(2)	12	(2)	8	(2)
	情報理工学コース	18	(5)	2	(0)	2	(0)	2	(0)
	電気電子工学コース	6	(0)	3	(0)	3	(0)	2	(0)
	生体情報コース	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	メディアネットワークコース	6	(2)	2	(1)	2	(1)	2	(1)
	電気制御システムコース	4	(0)	4	(0)	4	(0)	1	(0)
	機械知能工学科	14	(0)	3	(0)	2	(0)	0	(0)
	機械情報コース	8	(0)	0	(0)	-	-	-	-
	機械システムコース	6	(0)	3	(0)	2	(0)	0	(0)
	環境社会工学科	7	(4)	6	(4)	5	(3)	1	(1)
	社会基盤学コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	国土政策学コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	建築都市コース	3	(1)	2	(1)	2	(1)	0	(0)
環境工学コース	3	(2)	3	(2)	2	(1)	0	(0)	
資源循環システムコース	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)	
農学部	生物資源科学科	3	(1)	0	(0)	-	-	-	-
	応用生命科学科	6	(4)	0	(0)	-	-	-	-
	生物機能化学科	2	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	森林科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	畜産科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	生物環境工学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	農業経済学科	1	(0)	0	(0)	-	-	-	-
獣医学部	共同獣医学課程	1	(1)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
水産学部	海洋生物科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	海洋資源科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	増殖生命科学科	6	(1)	3	(1)	3	(1)	3	(1)
	資源機能化学科	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計		166	(54)	51	(18)	44	(15)	18	(6)

※ () 内の数字は女子で内数

国・地域別

国・地域	志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
中国（香港を含む）	105	(38)	40	(15)	35	(14)	16	(6)
韓国	59	(14)	11	(3)	9	(1)	2	(0)
台湾	1	(1)	0	(0)	-	-	-	-
オーストラリア	1	(1)	0	(0)	-	-	-	-
合 計	166	(54)	51	(18)	44	(15)	18	(6)

※ () 内の数字は女子で内数

北海道大学COI『食と健康の達人』拠点の岩見沢市における低出生体重児減のプロジェクトで第3回日本オープンイノベーション大賞 日本学術会議会長賞を受賞

2月25日（木）、北海道大学COI『食と健康の達人』拠点において取り組んでいる「低出生体重児減を実現した岩見沢市・北海道大学の産学地域共創プロジェクト」で「第3回日本オープンイノベーション大賞日本学術会議会長賞」を受賞しました。COI（センター・オブ・イノベーション）とは、文部科学省と国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が実施する、産学官連携によって革新的なイノベーションの実現を目指す研究開発プログラムです。本学は平成27年度から本プログラムに

採択され、筑波大学、北里大学、30社を超える企業・関連機関とともに『食と健康の達人』拠点として活動しており、拠点の研究成果や知見を活用した商品・サービスを『食と健康の達人』ブランドとして展開しています。なお、今回受賞した賞は、我が国のオープンイノベーションをさらに推進するために、今後のロールモデルとして期待される先導性や独創性の高い取組を内閣府が「日本オープンイノベーション大賞」として表彰しているものです。受賞を受けて、COI拠点長・株式

会社日立製作所シニアプロジェクトマネージャの吉野正則氏は、「岩見沢市、大学、企業、そして市民の努力が、低出生体重児を減らすことに繋がったと考えています。今後も、今ひとりひとりが自分らしく生きていけるInclusiveな社会の実現に向けて、さらに多くの方と共感のイノベーションを創っていきたいと思います」と今後への展望を述べられました。

（研究推進部産学連携課）



受賞式の様子

（左から、北海道大学病院産科馬詰 武助教、北海道大学COI副拠点長、森永乳業株式会社執行役員 食品開発研究所長 食品開発研究所長 武田安弘氏、北海道大学COI拠点長、株式会社日立製作所シニアプロジェクトマネージャ 吉野正則氏、日本学術会議会長 梶田隆章氏）

読売新聞北海道支社と包括連携協定を締結



協定書を手にする寶金総長（左）と稲葉支社長（右）

3月1日（月）、本学と株式会社読売新聞東京本社北海道支社は、相互に連携した社会貢献活動を推進するための包括連携協定を締結しました。

読売新聞北海道支社とは、小中校生に科学の面白さを伝えるイベント「サイエンスレクチャー」をはじめ、これまでも様々な連携活動を実施してき

ています。今回の協定締結により、本学の教育活動の高度化や、地域社会のより良い暮らしに貢献する諸活動のさらなる推進を図ります。

協定締結式には、読売新聞北海道支社から稲葉光秋支社長と長谷川聖治支社次長、本学からは寶金清博総長と吉見 宏理事・副学長が出席し、稲葉支

社長と寶金総長からそれぞれ、今後の意気込みが述べられました。

双方が密接な連携・協力を保ち、円滑な推進を図るための連携協議会を設置し、北海道の発展に寄与する取り組みを進めてまいります。

（総務企画部総務課）

災害用無線機設置・通信訓練を実施

1月26日（火）、札幌キャンパスの6拠点において、災害用無線機の設置・通信訓練を実施しました。

北海道胆振東部地震での経験を踏まえ、昨年度、災害発生時における情報収集手段の冗長化として、札幌キャンパス内に災害用無線機を設置しています。

本訓練は、平時から災害用無線機の使用を認識し、設置・通信方法を実践形式で体験しておくことで、災害発生時の確実かつ迅速な対応を身に付けることを目的として実施したものです。

内容としては、無線機配備場所となっている各部局等ごとに、昨年度策定した「北海道大学災害対策用簡易無線機マニュアル」に基づき、無線機及び可搬式アンテナを設置する「①設置訓

練」、実際に無線機端末を操作し本部とのテスト通信を行う「②通信訓練」の2部構成で行いました。

なお、6拠点合わせて39名が参加し、全員が無線機による通信を体験するなど実践的な訓練を行うことで、災害発生時の対応力向上を図りました。

また、本訓練により得られた課題を踏まえ、災害発生時のスムーズな対応

を実現するため、アンテナ設置レイアウトを見直すなどのブラッシュアップを行いました。

災害用無線機は、情報収集の一手段ではありますが、いざという時に有効活用できるように、定期的な訓練を継続して実施していく予定です。

（総務企画部総務課）



可搬式アンテナを設置する様子（工学部）



災害用無線機による通信訓練の様子（北キャンパスエリア（研究支援課））



災害対策用無線機配備場所

災害等危機対策本部設置訓練を実施

2月5日（金）、事務局において、災害等危機対策本部設置訓練を実施しました。

本学では、災害等発生時に学内の情報収集や対策等の意思決定を行うため、事務局大会議室に災害等危機対策本部を設置し、危機対応を行うこととしています。

本訓練では、平時における大会議室のレイアウトから、災害等危機対策本部としてのレイアウト変更、ネットワーク環境の切替、電話回線等の切替等、本部の環境構築作業等を経験することで、災害発生時に迅速に本部を立ち上げるための知識を身に付けることを目的として実施したものです。

本部設置後に、情報伝達訓練として部局からの被害情報を「北海道大学危機対応・業務継続マニュアル」で定めた報告様式等により集計し、模擬の災害等危機対策本部会議において被害情報を報告するまでの流れを体験・確認しました。

今後、本訓練を通して得た改善点等を踏まえ、マニュアルの改訂や本部レイアウト等を変更する予定です。

なお、本研修には、運営スタッフも含め事務局職員等19名が参加し、アン

ケートでは回答のあった13名全員が本部設置のイメージや災害発生時の問題意識について「非常に高まった」または「高まった」と回答する結果となりました。（資料アンケート結果参照）

また、参加者からは、本訓練を通し「具体的なイメージが付いた」「災害等発生時の対応力を高めるためにも多くの職員が訓練に参加すべきだ」など



FAXや無線等による被害情報を記録する情報班



各班に分かれ人的被害、物的被害等を集約する参加者

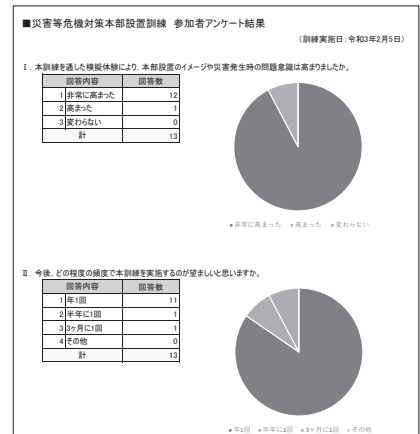
の声が多数ありました。

「北海道大学危機対応・業務継続マニュアル」策定後における、本部設置訓練は今回が初めての試みとなりましたが、来年度以降も継続的に実施し、より多くの職員が訓練に参加できるよう企画していく予定です。

（総務企画部総務課）



模擬本部会議の様子



資料 アンケート結果

Academic Fantasista 2月は池田貴子 特任助教 (CoSTEP) が札幌日本大学高等学校の生徒に向けてオンライン講義を実施

池田貴子特任助教(科学技術コミュニケーション教育研究部門, CoSTEP)が「殺さなくても、防げますー野生動物とのほどよい距離感を考えるー」と題し、札幌日本大学高等学校の生徒を対象としたオンライン授業を実施しました。都市に生息する野生動物の生態学と人獣共通感染症の疫学を専門とする池田特任助教は、おもにエキノコックス感染予防の観点から、キツネの生態を研究しています。講義では、キツ

ネへの餌付けなどの課題について映像を用いて紹介し、「人と野生動物が共生するためには、適切な距離を保つことが大切です」と語りました。また、課題解決のためには専門家と様々な立場の人達が対話する、科学技術コミュニケーションが必要となることも実例をもとに解説しました。

参加した高校生からは、「キツネに対する考え方、捉え方が大きく変わりました」、「共生の意味についてしっ

かり理解できました」などの声が寄せられました。

学生時代よりフリーランスのグラフィックデザイナーとして活動し、CoSTEPではサイエンスビジュアライゼーションを指導している池田特任助教。スライドの見やすさ、分かりやすさ、そしてフォントの使い方なども高校生たちから好評でした。



映像を用いて都市に生息する野生動物の生態を紹介する池田特任助教



熱心に耳を傾ける生徒たち

- 日 時：令和3年2月3日(水) 17:00-18:30
- 会 場：札幌日本大学高等学校, オンライン開催 (Zoom)
- 参加生徒：1-2年生9名
- 講 師：池田貴子 特任助教 (科学技術コミュニケーション教育研究部門, CoSTEP)
「殺さなくても、防げますー野生動物とのほどよい距離感を考えるー」

Academic Fantasistaとは?

本学の第一線の研究者が出張講義や大学訪問を通じて高校生に研究を伝える「Academic Fantasista (アカデミックファンタジスタ)」。今年度は新型コロナウイルス対策を十分に行って、札幌近郊の高校等を対象に15名の教員が

講義を実施中です。当事業は、内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと、平成24年度より実施しています。

Facebookでも講義レポート等を随

時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

@Hokkaido.univ.taiwa

<https://www.facebook.com/Hokkaido.univ.taiwa>

(総務企画部広報課)

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をする事としています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報
基金累計額（2月28日現在）

29,136件 5,333,486,277円

2月のご寄附状況

法人等7社、個人207名の方々から9,002,170円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

アングルトライ株式会社、医療法人王子総合病院、弁護士法人 佐々木総合法律事務所、ニューオータニイン札幌、
北大全学教育基礎科目教科書『地球惑星科学入門』著者一同

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青木 俊介	阿部 柊生	荒井 修	安藤 伸一	池田 恵子	池田 大輔	池田 慎
石井 哲夫	石渡 英夫	乾 賢	井原 博	入倉 修一	入澤 秀次	岩澤 純	上野 貴希
江波戸 謙	縁記 和也	大越 太郎	大沢 正人	太田 博之	大田 雅嗣	大野 愛	大原 正範
大森 幸一	岡田きょう子	小川 俊弘	小川 秀彰	奥田 英信	小口 邦子	奥村 和久	尾島 裕和
小田原一史	小原 鉄也	小柳 毅	折館 伸彦	片山 琢	加地 苗人	金川 眞行	亀山健三郎
河井 康孝	川崎 正和	河本 充司	菅野 彰一	菊池加奈子	菊地 順子	岸並 正憲	岸本 理和
喜多 司郎	工藤 俊哉	國枝 保幸	久野 宏幸	小島 隆人	小関 佳孝	後藤 晶子	小林 真美
古室あづさ	近藤 健	齊藤 晋	斉藤 久	坂井 厚子	坂本 大介	左近 祥夫	佐藤 憲
佐藤 直	佐藤 成実	澤村彰一郎	澤村 正也	三升畑元基	志済 聡子	清水 洋	清水友紀子
白鳥 貴久	菅原 新也	杉井 敬	杉江 和男	鈴木健太郎	鈴木 貴之	須藤 幸雄	瀬戸口 剛
瀬名波栄潤	田方 秀次	高橋 彩	高橋 英之	高橋 均	高林 秀樹	竹内 信彦	田中 正一
辻谷 直利	土屋 潔	土屋 健	土家 琢磨	土屋 裕	椿谷香菜子	寺井伊都子	寺澤 睦
戸田 純子	飛澤由紀子	豊田 威信	中 一輝	中塚 英俊	中西 孝	中村 隆	西田 実弘
野村 晃子	花田 秀一	林 幹浩	馬場 均	PieperThorsten	東 傑人	檜沢 方孝	福士 幸治
福田 正晴	福永 悟郎	藤岡 薫	干野 洋	堀岡 咲枝	前田 博	前田由起子	松田 健一
松田 裕樹	松原 謙一	松原 友姫	松本伊智朗	松本 修一	丸山美貴子	三上 敦大	三國 雅人
宮岸 隆司	宮崎 隆志	宮田 信幸	宮本 顕二	村井 貴	村上 泰一	村上 幸夫	村武 直樹
本杉 一樹	森 義行	守屋 淳	矢嶋 剛	柳原 哲郎	山口 淳二	山崎 剛	山田 俊
遊佐 浩	柚木 孝敬	余湖 兼右	横山 考	吉川 浩之	吉田 年克	吉田 広志	吉田 裕子
脇坂 明美							

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（個人）

江波戸 謙, 大沢 正人, 高橋 彩, 林 幹浩, 遊佐 浩, 松田 健一

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスして下さい。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html>

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、基金事務室に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、基金事務室にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、基金事務室にもご用意していますので、基金事務室にお越しただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

令和2年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行



表彰状を受ける教育研究総長表彰被表彰者



表彰状を受ける教育研究支援業務総長表彰被表彰者

2月19日（金）、学術交流会館において「教育研究総長表彰」「教育研究支援業務総長表彰」表彰式が執り行われ、関係者列席のもと、寶金清博総長から被表彰者に、賞状及び報奨金（目録）が授与されました。

教育研究総長表彰は、教育活動及び研究活動を通し、特に優れた功績をあげた教員を、また、教育研究支援業務総長表彰は、業務改善等の取り組みを通し優れた功績をあげた職員を顕彰することにより、本学の活性化と更なる

発展に資することを目的としたものです。

なお、このたび表彰を受けられた方々は、下記のとおりです。

（総務企画部人事課厚生労務室）

<教育研究総長表彰>

所 属	氏 名
理学研究院	武 次 徹 也
理学研究院	日 置 幸 介
理学研究院	塚 本 尚 義
薬学研究院	中 川 真 一
先端生命科学研究院	綾 部 時 芳
先端生命科学研究院	中 島 祐
教育学研究院	松 田 康 子
メディア・コミュニケーション研究院	岡 本 亮 輔

所 属	氏 名
メディア・コミュニケーション研究院	TANAKA JAY MATSUI
工学研究院	小 崎 完
工学研究院	渡 慶 次 学
医学研究院	豊 嶋 崇 徳
スラブ・ユーラシア研究センター	長 縄 宣 博
高等教育推進機構	鄭 惠 先
高等教育推進機構	飯 田 直 弘

<教育研究支援業務総長賞（貢献賞）>

最優秀賞

医療部門 北海道大学病院 検査・輸血部

優秀賞

事務部門 人材育成本部 上級人材育成ステーションS-cubic

事務部門 産学・地域協働推進機構 産学連携推進本部技術移転部門

技術部門 触媒科学研究所 向井 慎吾

医療部門 北海道大学病院 医療技術部特定技術部門生体技工部

奨励賞

技術部門 水産科学研究院 清水 裕

技術部門 工学研究院 遠堂 敬史

技術部門 工学研究院 工学系技術センター技術部

（複合量子ビーム超高压電子顕微解析研究室）

技術部門 低温科学研究所 技術部装置開発室／先端技術支援室

技術部門 低温科学研究所 小野 数也

総長と学生とのオンライン対話企画「寶金総長に伝えたい！」を開催

1月26日（火）、総長と本学に在籍する学生がオンラインで対話する「寶金総長に伝えたい！」を開催しました。総長と学生が直接対話する機会として、今回が初めての試みとなります。

当日は、寶金清博総長及び山口淳二理事・副学長のほか、各学院・研究科等から修士課程15名、博士（後期）課程6名の計21名の大学院学生（外国人留学生4名を含む）がオンラインで参加しました。

山口理事・副学長の進行のもと、始

めに寶金総長から挨拶があり、「大学は社会の様々な人たちとのエンゲージメントが重要。早くこのような機会を設けたかった。色々なことを伝えてもらいたい。」と述べられました。

続いて、学生による自己紹介の後、「コロナ禍において総長に伝えたいこと」をテーマに意見交換を行い、参加した学生から、「コロナ後の大学の在り方について北大全体でどう考えるのか」「オンライン授業の質の担保」「行動基準のレベルの柔軟な運用」「様々なものがオンラインとなったこ

とによるメリットの共有」など、テーマに関する様々な意見や質問があり、寶金総長及び山口理事・副学長から、それぞれの質問に対しての回答がありました。

活発な意見交換は長時間にわたって行われ、本学及び参加された学生の双方にとって大変有意義な機会となりました。

（学務部学務企画課）



学生からの質問に答える寶金総長



学生からの質問に答える山口理事・副学長（左）



会場の様子

令和2年度小島三司奨学金受給者の決定

この度、令和2年度小島三司奨学金の受給者が決定しました。

本奨学金は、本学の元職員である故小島三司氏の遺志に基づき、アルツハイマー病を研究する大学院生に、奨学金を給付することにより、研究活動の充実を図り、医学の進歩に寄与するこ

とを目的として創設された、返還義務のない給付型の奨学金です。

今年度は、生命科学院から2名の推薦があり、厳正な審査を行った結果、推薦のあった1名を本奨学金の受給者として決定しました。受給者には、年額60万円が給付されます。

【令和2年度受給者】

生命科学院 齋藤 遥

（学務部学生支援課）

北海道との共催により「SDGs×北海道 交流セミナー2021」をオンライン開催

2月10日(水)に、北海道と本学の共催により、「SDGs×北海道 交流セミナー2021」をオンラインにて開催しました。

本学は、大学の社会貢献の取組みを国連の持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals, SDGs) の枠組みを使って評価する世界大学ランキング「Times Higher Education インパクトランキング2020」で、国内1位を獲得しています。

内閣府SDGs未来都市に選定され、先進的な取組みを進める北海道と協力し、「SDGs×北海道 交流セミナー2021」を開催しました。

交流セミナーでは、鈴木直道北海道知事と本学の寶金清博総長のビデオメッセージに続き、慶應義塾大学の高木 超特任助教より『北海道の未来を変える17の目標「SDGs」』と題して、持続可能な成長の仕組みづくりの必要

性についての基調講演が提供されました。続く事例紹介のセッションは、大学力強化推進本部の和田肖子URAが司会を務め、北極域研究センターの大西富士夫准教授が「SDGs達成に向けた北海道大学の貢献～課題解決の最前線から」と題して、本学の取組みを紹介し、北海道をフィールドに研究を行う同センター若手研究者のホルヘ ガルシア モリノス准教授から気候変動に伴う動植物域の移動がもたらす影響に関する研究が紹介されました。

その後、参加者との質疑応答が行われ、通訳は国際連携機構の植村妙菜URAが務めました。

続く事例発表では、「今、高校生が伝えるSDGs 北海道名寄産業高等学校農業クラブの実践事例」と題し、北海道名寄産業高校の生徒からの発表が行われました。最後に「北海道におけるSDGsの推進状況について」が報告

され、セミナーは終了しました。

当日は、オンライン開催にも関わらず355名が参加し、予定した時間内では足りないほど活発な質疑応答が行われました。また、HBCによるテレビ取材も行なわれ、開催当日夕方の地域情報番組において、セミナーの様子が放送されました。

さらに、セミナー終了後から2月末まで開催されたオンラインポスターセッションでは、本学のほか、企業等のSDGsの取組みが紹介され、掲示板での意見交換が行われました。

北海道と共催した今回のイベントを通して、本学のSDGsの貢献に関する取り組みを、大学単体では届かない視聴者層にも届けることができた貴重な機会となりました。改めて関係者の皆様に御礼申し上げます。

(大学力強化推進本部)



セミナー（配信会場）の様子

「SDGs×北海道 交流セミナー2021ポスターセッション」に DEMOLA HOKKAIDOが出展

2月10日（水）に開催された北海道庁主催「SDGs×北海道 交流セミナー2021」ポスターセッションに、本学で実施しているDEMOLAプログラムが出展いたしました。ポスターはオンライン上の特設会場に2月末まで掲載されました。

SDGsの「質の高い教育をみんなに」「パートナーシップで目標を達成しよう」のゴールに向けた取り組みとして紹介しました。DEMOLAはフィンランド生まれの産官学連携イノベーション創出プラットフォームです。学生と

企業担当者が一緒にチームを組み、2か月間かけて企業のリアルな課題解決に取り組むのが特徴です。オンラインで実施しているため、参加学生は大学生、大学院生であれば所属大学に関わらず、どこからでも参加できます。多様性のあるチームメンバーが企業、学生に関わらずチームビルディングを行い、目的に向かって互いにモチベーションを高めながら突き進む姿は、まさにパートナーシップであるといえます。

2021年度は4月10日（土）から第1回目のプログラムを開始します。下記

ウェブサイトで最新の情報を公開しています。

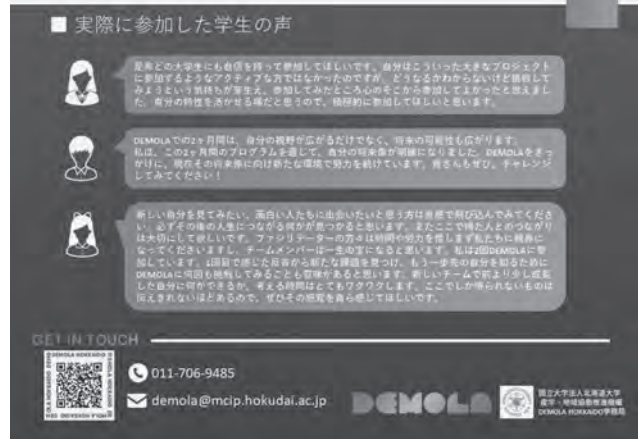
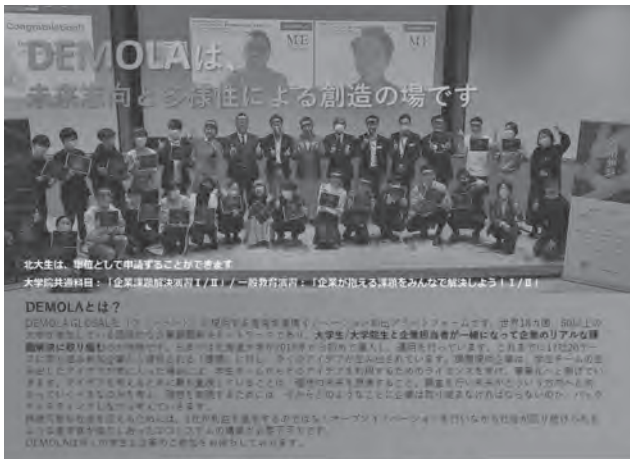
「DEMOLA HOKKAIDO」で検索してください。

（詳細はこちら <https://demolahokkaido.wixsite.com/hokudai>）

また、ご質問等がありましたら、お気軽に産学・地域協働推進機構 DEMOLA事務局

(demola@mcip.hokudai.ac.jp) までお問い合わせください。

（産学・地域協働推進機構）



ポスター表

ポスター裏

DEMOLA HOKKAIDOの紹介動画・CMを制作

この度、本学で実施しているDEMOLA HOKKAIDOの紹介動画・CMを公開しました。DEMOLAはフィンランド生まれの産官学連携イノベーション創出プラットフォームで、世界16カ国、60大学以上が参加している国際的な企業課題解決ネットワークです。学生と企業担当者が一緒にチームを組み、企業のリアルな課題解決に取り組むのが特徴です。文部科学省の次世代のアントレプレナーを育成するためのEDGE-NEXT事業の一環として2018年から日本では初めて、北海道大学が導入致しました。約3年間をかけて17社20課題に取り組み、これまでに参加した学生は、本学をはじめ小樽商科大

学、北海道情報大学、藤女子大学や札幌大谷大学など様々な地域の11大学から集まり、延べ130名にも上っています。2020年度はフルオンラインでの開催体制を整えたことから、東京理科大学や海外在住の学生の参加も実現いたしました。

今回作成した紹介動画はロングバージョンとショートバージョン（企業向け・学生向け）の計3本です。制作には、数多くの学生が関わってくれました。本学、小樽商科大学、北海道情報大学の学生が出演し、そして、ナレーションとして藤女子大学の学生に協力いただきました。また、ショートバージョンでは、本学の産学・地域協働推

進機構のメンバーがエキストラとして参加しています。ぜひ、皆様一度下記QRコードよりご覧ください。

（詳細はこちら <https://demolahokkaido.wixsite.com/hokudai>）

現在、2021年度のDEMOLAにご参加いただける企業の募集を行っています。ご興味のある方は産学・地域協働推進機構DEMOLA事務局（demola@mcip.hokudai.ac.jp）までお問い合わせください。

ぜひ、一緒にイノベーションアイデアを生み出す共同創造の場を体感しましょう。

（産学・地域協働推進機構）



CM画像



紹介動画画像



QRコード

第3回ICReDD国際シンポジウムを開催

化学反応創成研究拠点（ICReDD／アイクレッド）では、2月22日（月）から24日（水）の3日間の日程で、ストラスブール大学（フランス）化学部とのジョイントにより、第3回国際シンポジウムを開催しました。本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、海外との全編オンラインによる開催となりました。

本シンポジウムは、「Toward Interdisciplinary Research Guided by Theory and Calculation」（理論と計算に先導される融合研究を目指して）をテーマに、ノーベル賞受賞者2名を含む世界的に著名な国内外の研究者8名を講演者として招待し、「計算科学・情報科学・実験科学の融合研究」について活発な議論が展開されました。

初日のオープニングセッションでは、資金清博総長の開会挨拶に続き、宇川 彰WPIプログラムディレクター（PD）、ストラスブール大学化学部長のRachel Schurhammer教授による挨拶がありました。続いて、ICReDDとストラスブール大学化学部は、学术交流の推進を目的として、本年1月に部局間の学术交流協定を締結しましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で見送っていた協定締結式に代わるセレモニーを行い、改めて、強固な連携関係を築き、双方の更なる研究交流の

発展に向けて協力していくことを確認しました。

引き続き行われたシンポジウムの第1セッションでは、ユストゥス・リービヒ大学（ドイツ）のPeter R. Schreiner教授による、分子の立体電子効果や化学結合の電子相関効果に関する講演を皮切りに、1987年にノーベル化学賞を受賞した、ストラスブール大学のJean-Marie Lehn教授による、超分子化学における複雑な構造変化の動的化学に関する講演、同じく2016年に同賞を受賞した、ストラスブール大学のJean-Pierre Sauvage教授による、人工分子機械に関する発見と設計、応用に関する講演が行われ、その研究哲学にも触れられるまたとない機会に恵まれました。

2日目の第2セッションでは、青山学院大学の長谷川美貴教授、ICReDD主任研究者の龔 劍萍教授、カタルーニャ化学研究所（スペイン）のFeliu Maseras教授が高分子材料研究に関する講演を行い、活発な議論が行われました。

最終日の第3セッションでは、イリノイ大学（アメリカ）のScott E. Denmark教授、ICReDD拠点長の前田 理教授、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（アメリカ）のKendall Houk教授、ICReDD主任研究者の武次徹也教

授が講演し、続いて、第4セッションでは、ストラスブール大学のPaolo Samori教授、ICReDD主任研究者のAlexandre Varnek教授及び伊藤 肇教授が講演を行い、計算化学・ケモインフォマティクスとそれらを融合した最先端の材料化学・有機合成化学に焦点が当てられ、これらの融合研究による最先端の高速反応開発について討論されました。

クロージングセッションでは、異 和行WPIプログラムオフィサー（PO）、ICReDDエグゼクティブディレクターの石森浩一郎教授から挨拶があり、最後に増田隆夫理事・副学長が講演者と参加者への感謝と挨拶を述べ、活況のうちに閉会となりました。

今回は、海外とのオンライン開催となりましたが、欧米との時差があったにも関わらず、国内外から3日間で279名が参加し、様々な分野の研究者や学生が、オンラインを通じて活発な議論や質疑応答を行い、本シンポジウムは盛会裏に終了しました。

ICReDDの研究を世界へ発信し、様々な分野の研究者との融合研究を展開していくため、今後もこのような国際シンポジウムを開催していく予定です。

（化学反応創成研究拠点（ICReDD））



開会挨拶をする資金総長



Jean-Marie Lehn教授による講演



Jean-Pierre Sauvage教授による講演



協定締結セレモニーの様子（左：Schurhammerストラスブール大学化学部長 右：前田ICReDD拠点長）



閉会挨拶をする増田理事・副学長

日本留学海外拠点連携推進事業サブサハラ拠点のロゴを作成

本学アフリカサカオフィスは、平成26年から実施してきた留学コーディネーター事業に引き続き、令和元年に文部科学省の日本留学海外拠点連携推進事業に採択され、日本の大学へのアフリカ・サブサハラからの留学生の受入促進のための幹事校としての役割を担っています。その活動の一環として、昨年中に新規ウェブサイト開設や、Facebook及びTwitterを用いた広報による活動の拡充を進めているところで、今回、サブサハラ・アフリカ地域の人々に事業により親しみを持っていただき、地域内での活動をより円滑に行うことを目的として、学内公募によってサブサハラ拠点のロゴ制作を行いました。

本学はサブサハラ・アフリカからの留学生数が全国で最も多く、優秀な成

績を修める留学生がいることでも知られ、今後も交流が盛んに行われることが期待される地域でもあります。

今回、多くの応募があった中、最優秀作品として本学経済学部4年の三上苑子さんの作品がロゴとして選ばれました。日本美術で用いる筆を模して描かれたアフリカ大陸の中に、日本を彷彿させる日の出が描かれ、サブサハラ拠点のザンビア及びケニアに桜の花びらをあしらひ、学位帽を添えた作品となっています。

デザインをされた三上さんは、本ロゴの制作を通しての感想を次のように述べています。

「サブサハラ地域の若者に向けた、日本に親しみを持ってもらえるロゴマークとして、日本らしい繊細な質感と、アフリカ大陸の自然の雄大さが両立す

るデザインを目指して制作させていただきました。

ロゴマーク制作をきっかけとして、サブサハラ地域の国々が持つ文化の奥深さや歴史の複雑さを再認識し、より強く興味関心を持つことができたと感じています。

そして、制作を通して、留学支援という高等教育の発展を推進する有意義な事業を盛り上げ、ひいては多くの人々に豊かな学びの場をもたらすお手伝いができることを光栄に思っています。」

本ロゴを用いて、今後ますます、サブサハラ・アフリカ地域における留学促進の事業を遂行してまいります。

(国際部国際連携課)



ロゴのデザインを制作された三上さん



ロゴ



ロゴ

第3回日露産官学連携実務者会議を開催

1月27日(水)に、「第3回日露産官学連携実務者会議」及び「令和2年度大学の世界展開力強化事業採択校(ロシア)活動状況報告会」をオンラインで開催しました。この会議は、本学と新潟大学が共同採択された文部科学省の平成29年度「大学の世界展開力強化事業～ロシア等との大学間交流形成支援～(タイプB:プラットフォーム構築プログラム)」の事業(HaRP事業)の活動の一つです。昨年度実施された第2回の会議では、日露交流を行う大学(日本の大学19校、ロシアの大学30校)に加え、29の機関・団体から約160名が一堂に集い日露交流の発展及び促進を目的として情報共有し意見を交わしました。第3回の今回は、新型コロナウイルス感染症流行拡大の影響によりオンラインでの開催となりましたが、日露交流を行う大学(日本の大学23校、ロシアの大学47校)を含め、文部科学省、経済産業省、関係企業・団体等、日本側31機関、ロシア側57機関から、昨年度を上回る約185名が参加しました。なお、本会議は、日露大学協会、日露地域・姉妹都市交流年事業行事として認定を受け実施されました。

「第3回日露産官学連携実務者会議」に先立ち、「大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校活動状況報告会」が開催され、平成29年度に採択された7事業8大学(千葉大学、東京外国語大学、東京工業大学、金沢大学、長崎大学・福島県立医科大学、東海大学、近畿大学)が、コロナ禍におけるロシアとの教育交流の取組やその課題についての報告を行いました。対面と同様の教育効果をもたらすよう工夫を

凝らしたオンラインによるロシアとの教育交流の取組が各大学より紹介されるとともに、文部科学省担当者と採択校間での意見交換も行われ、世界展開力強化事業関係者間で有益な情報共有を行うことができました。

続いて「第3回日露産官学連携実務者会議」では、冒頭の本学の横田 篤理事・副学長及び佐藤邦明文部科学省高等教育局主任大学改革官・国際企画室長の挨拶から始まり、二部構成で行われました。

第一部は、「日露産官学連携によるキャリア支援」をテーマとし、本学から2020年度の専門セクション活動報告や第一部の論点(産官学コンソーシアムの取組と大学の実務者教育との相互連携)の説明が行われた後、産官学それぞれの立場から、キャリア支援の取組について発表がありました。まず、独立行政法人日本貿易振興機構(JETRO)から、ロシア高度人材に関する調査結果に基づく日露高度人材交流の現状や今後の課題についての発表がありました。続けて、ロシア側の高等経済学院から、ユニクロロシアとの共同インターシッププログラムについて、サハリン国立大学及び在ユジノサハリンスク日本国総領事館から、廃棄物処理・エネルギー等の分野の日本の知見をロシアの若手研究者に伝授するための産官学連携共同セミナーについての説明が行われました。日本側からは、近畿大学・東京外国語大学による日露人材育成プログラム参加者へのキャリア支援の取組、具体的には企業インターンシッププログラムやOB・OGによるビジネス講義などの実施による実務者育成についての説明があり

ました。さらに、経済産業省の8項目の協力プランに基づく日露人材育成や地域間交流の取組の説明に続き、北海道より、医療・行政分野・ロシア語教育等における北海道とロシアとの地域間交流やロシア人材活用に係る取組の紹介が行われました。その後の意見交換のセッションでは、各発表者により、インターンシッププログラム実施にあたっての工夫や、実務者育成に向けた大学教育の役割などが掘り下げて議論されました。最後に、司会進行を務めた本学の瀬戸口剛工学研究院長が、今後もHaRP事業を通じて企業・大学間の個別のネットワークやその知見を広く共有し、企業・大学双方にメリットがある連携を進めることの必要性を述べ、第一部を総括しました。

第二部は、「今後の日露教育交流の発展に向けて」をテーマとして、ロシア連邦高等教育科学省イーゴリ・ガンシン国際連携部部長の来賓挨拶(代読)に続き、日露大学協会の下に置かれている日露学生連盟・人材交流委員会の活動報告が行われました。人材交流委員会の報告では、日露大学間の大学教育制度の相違や単位互換・認定の現状にかかる説明が行われ、特に、ロシアの大学におけるコンピテンス(学生が獲得すべき能力)を基準としたカリキュラム編成やネットワーク形式(Network form)と呼ばれる他機関との教育連携の枠組みについて、日本の大学に向け紹介が行われました。各機関による発表のセッションでは、ロシア側大学を代表し、モスクワ国立大学が、コロナ禍における学生のモビリティの向上に向けた取組、特に、オンラインによる授業や共同研究の実施、



横田理事の開会挨拶



文部科学省 佐藤 邦明 主任大学改革官による挨拶



第一部司会進行の瀬戸口教授

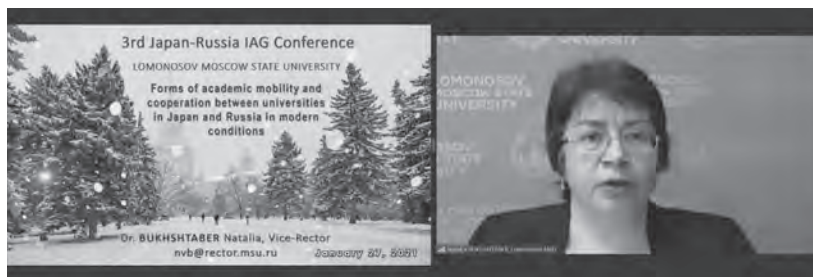
日本の大学で取得した単位の認定方法について発表しました。日本側の大学からは、新潟大学の医学分野でのダブルディグリープログラムにおける単位互換、本学のロシアの大学とのネットワーク形式を利用したジョイントマスタープログラムといった特色ある取組が紹介されました。加えて、HaRP事業実施大学である本学から、HaRP事業の補助金期間が終了する2021年度以降の事業実施計画の構想と参加者に共有しました。意見交換のセッションでは、日露双方の機関から、単位互換や

コチュテルプログラムといった教育連携の事例が紹介されるとともに、日本側でコンピテンス概念を導入することにより教育の質を担保する形で教育連携が発展することへの期待が述べられました。最後に、人材交流委員会委員長である本学の加藤博文教授が、コンピテンスやネットワーク形式の概念に基づき、日露大学間の教育プログラムの共有化の取組を進めるべく、継続した議論を行うことに言及し、閉会となりました。

本会議では、第一部・第二部を通し

て、様々な観点から人材育成に関する情報共有や意見交換が行われるとともに、HaRP事業における日露交流の取組を多角的に多くの方に知っていただくことができました。この会議を契機として、今後も、日露交流に携わる実務者同士のネットワークをさらに強化するとともに、産官学連携による人材育成や日露大学間の教育連携を発展させるべく、様々な取組を実施する予定です。

(国際部国際連携課)



第二部 モスクワ国立大学ブーフシターベル副学長の発表

本学寶金総長がモスクワ国立大学サドーヴニチ総長，新潟大学牛木学長とオンライン懇談を実施・2021年9月の日露大学協会総会開催方針について等合意

1月18日（月）に、本学の寶金清博総長，横田 篤理事が，モスクワ国立大学ヴィクトル アントノヴィッチ サドーヴニチ総長及び新潟大学の牛木辰男学長とのオンライン懇談を行いました。

本学は，文部科学省の平成29年度「大学の世界展開力強化事業～ロシア等との大学間交流形成支援～（タイプB：プラットフォーム構築プログラム）」に新潟大学と共同採択され，「日露経済協力・人材交流に資する人材育成プラットフォーム事業（通称，HaRP事業）」を実施しています。同事業では，日本とロシアの大学間交流の情報や経験を集約し，活用するためのプラットフォームを構築するほか，平成28年12月の日露首脳会談において設立が合意された「日露大学協会」の具体的な活動計画の立案を行うことなどが求められています。本学は，日露大学協会の日本側幹事校であり，モスク

ワ国立大学はロシア側幹事校となっていることから，令和2年10月に就任した本学の寶金総長，横田理事の就任挨拶を兼ねた本懇談を実施する運びとなり，日露大学協会を通じた日露交流の推進についての意見交換が行われました。なお，本学は，モスクワ国立大学内に同大学との共同オフィスも設置し，日露大学協会の活動支援や日本へのロシア・CISからの留学生を呼び込む「日本留学海外拠点連携推進事業」も実施しています。

サドーヴニチ総長は，平成4年の就任以来，長年にわたり日露の学術交流・学生交流に尽力されていることから，懇談の冒頭に日露交流の歴史についてお話しされました。続いて，寶金総長から，本学のロシアにかかる研究の歴史や，近年の日露大学協会やHaRP事業の活動についての紹介がありました。牛木学長からは，令和3年9月に新潟大学が主催する日露大学協

会第3回総会（第9回日露学長会議）の実施計画の説明がありました。また，横田理事から，第3回総会に向け，本学が積極的に取り組んでいるSDGs（持続可能な開発目標）分野においてフォーラムを実施予定であることが言及されました。

最後に，サドーヴニチ総長から，学生交流や共同教育プログラムの開発などをさらに推進すること，ウェビナーなどオンラインを活用した日露大学間の交流の場を設けていくこと，日露大学協会下に組織されている日露学生連盟の活動を引き続き支援することにより，青少年の異文化コミュニケーション能力面での人材育成を行っていくことが提案され，新潟大学，本学ともに賛同し閉会となりました。

（国際部国際連携課）



懇談の様子（左上：新潟大学牛木学長，右上：モスクワ国立大学サドーヴニチ総長，左下：寶金総長，右下：横田理事）

「次世代研究者のためのSDGsセミナー」を開催

2月17日（水）（第1日目）と3月1日（月）（第2日目）の2日間にわたり、「次世代研究者のためのSDGsセミナー」を、Zoomによるオンライン形式で開催しました。

本セミナーは、研究分野を取り巻く社会問題や研究が社会に与える影響を多様な視座から分析するとともに、研究者自身が社会的な影響から逆算して新たな課題を発掘して研究ストーリーを組み立てることを目的とし、2日間で延べ18名の研究者が各部局から参加しました。

第1日目は、SDGパートナーズ株式会社CEOの田瀬和夫氏から、「SDGsの成り立ちや本質的な意味」、「演繹的と帰納的思考方法」、「社会課題の最新動向」に関する講演と、同社スタッフから「分析の進め方」の説明があり、続いて、「社会視点と自分視点で研究を捉えなおす」ことを目的とした

個人ワークを行いました。このセッションでは複数の雑談部屋（ブレイクアウトルーム）を準備して参加者が自由に交流できるようにし、同社スタッフや人材育成本部教員も参加者に加わって意見交換を行いました。

第2日目は、初日のセミナーをもとに個人ワークでまとめた「研究ストーリー」を発表いただきました。発表は所属部局や専門分野が異なる5名の研究者が発表、ファシリテーターは第1日目に講演いただいた田瀬氏が務め、発表に対するコメントや質問を交えながら参加者にも意見や感想を求める形で進行了。発表者には第1日目の講演や個人ワークを通じて得られた気づき、それに基づく研究ストーリーを披露いただきましたが、着眼点や分析の方法はいずれも興味深い内容でした。個々の発表に対して田瀬氏からは示唆に富んだコメントがあり、参加者

はより一層SDGsについての理解を深めることができ、密度の濃い時間を共有化することができました。セミナー終了に際し、人材育成本部・研究人材育成推進室（L-Station）米田純一特任教授は、「次世代研究者のためのSDGsセミナーは人材育成本部としても新しい試みでしたが、今回の経験や参加者のフィードバックをもとにさらに発展させていきたいと思います」と締めくくりました。

大学の研究・教育現場でも「持続可能な開発目標（SDGs）」への貢献が問われる時代です。本学が「比類なき大学」への発展に貢献するために、人材育成本部では来年度以降も持続的にSDGsセミナーを企画する予定です。

（人材育成本部）



SDGパートナーズ株式会社CEO田瀬和夫氏による講演



経済学研究院 齊藤 尚准教授による発表



工学研究院 富田健太郎准教授による発表



セミナーの様子



人材育成本部 米田特任教授の挨拶

博士人材と企業の情報交換会 第45回「赤い糸会（赤い糸ONLINE）」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、1月14日（火）～1月26日（火）、オンラインにて本年度第3回（通算第45回）「赤い糸会（赤い糸ONLINE）」を開催しました。

本会は、博士人材を求める企業と自身のキャリアの可能性を広げたい博士人材が専門分野のみならず、専門分野を超えた交流を行い、博士人材の活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回、参加した企業は21社、博士人材は28名となりました。博士人材の内訳は、本学の博士人材が10部局27名、平成26年度末より採択された科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業による連携大学からの博士人材が1名（新潟大学1名）です。

本会は従来、企業と博士人材が対面で交流する場でしたが、今年度は、この長年の経験から得られた異分野交流や博士人材の質の高いプレゼンテーションをオンラインでも実施できるよう工夫しています。例えば、博士人材には、プレゼンテーション演習を受講し講師から動画作成の許可を得て自身の

紹介動画を作成しており、また、自分の専門とは一見離れた企業とも交流するように促しています。

赤い糸ONLINEの専用サイトでは、このような指導を受けて作成した博士人材の紹介動画や企業の動画を双方が視聴、閲覧およびチャットにより交流し、その後Zoomにて博士人材が企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行なわれました。

開催後、企業からは「博士後期課程1年の学生が参加できる点も、早い段階からさまざまな企業と交流ができ学生にとっても有意義な場であると感じております。」「様々な分野の研究者の方の研究を知ることができたのと同時に、弊社に関心を持ってもらえる機会となったため、有意義であった。」との声をいただくことができました。

また、参加した博士人材からは「異分野で思ってもみなかったことをやっている企業がいる。企業名からではわからない」「私は赤い糸会に参加してから民間企業に就職したくなりましたので、とても参考になりました」「何かからすればいいかわからない時にしたら

いいことに対して考えられるようになって良い機会でした」など、嬉しい声も聞かれました。

オンライン化によって参加企業数を増やすことが可能となったため、今年度は初めて企業も複数回参加可としたところ、第1回～第3回の合計参加数は延べ98社（実数66社）となり、多くの企業に複数回ご参加いただきました。

人材育成本部では赤い糸会のほか、Advanced COSA、個別キャリア相談、キャリアパス多様化支援セミナー、キャリアマネジメントセミナー、企業での長期インターンシップや、コンソーシアムの連携大学である東北大学や名古屋大学等が運営するプログラムの活用などによって、博士人材の実践力を高めています。

ご興味のある方は、人材育成本部のホームページをご覧ください。

(<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>)

(人材育成本部)



吉原拓也特任教授の趣旨説明



Zoomによる個別情報交換の説明



博士人材と企業の個別情報交換

■ 部局ニュース

アイヌ・先住民研究センターFD 「学生を指導する際に問題となるハラスメント」を開催

アイヌ・先住民研究センターでは、「ハラスメント」を防止（予防）する方策の知見を得るためのFD研修を、2月18日（木）、Zoomによるオンライン形式で開催しました。講師は、本学のハラスメント相談室で実際の業務に当たられている専門相談員で弁護士の上田絵理氏と、臨床心理士の佐藤直弘氏にお願いし、質疑応答を含め約1時間にわたり、昨今の本学におけるハラ

スメントの状況（実態）について説明がありました。

内容は、Ⅰ. ハラスメントとは、Ⅱ. 本学におけるハラスメントの定義と具体例、Ⅲ. 本学におけるハラスメント相談対応の流れと状況（実態）、Ⅳ. ハラスメントの予防－学生に接する際の留意点－、の4節に分け、実例を交えた言及がありました。

研修の後に質疑応答の時間が設けら

れ、今般のコロナ禍における授業での学生への対応、マイノリティに関する学内相談や対応などについて意見交換が行われました。

今回はセンター内の教職員17名がZoomで参加し、今後取り組むべき方向性の示唆が得られた有意義なFDとなりました。

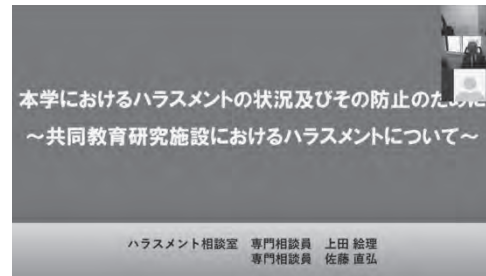
（アイヌ・先住民研究センター）



進行役の加藤博文アイヌ・先住民研究センター長



講師のハラスメント相談室の先生方



研修はZoomにより資料を写しだして実施

北海道大学学芸員リカレント教育プログラム（学芸リカプロ）報告会 プレゼンテーション+シンポジウム「ミュージアムの誕生と成長」

日時：令和3年2月20日（土）
13時00分～17時00分
オンライン開催

平成30（2018）年度から3年間にわたって活動してきた北海道大学学芸員リカレント教育プログラム（通称、「学芸リカプロ」）を締めくくる最後のイベントとして、2月20日（土）、今年度の公開成果報告会を開催しました。オンラインでの開催となりましたが、学芸リカプロの受講者はもとより、東京、大阪、名古屋、京都、福岡など、全国各地から延べ58人が参加し、議論と親睦を深める機会となりました。

最初に、開会の挨拶を行ったのは、山本文彦理事・副学長です。山本理事は、前職の文学研究院長時代から学芸リカプロを見守ってくださり、2018年のキックオフシンポジウムでもご挨拶を頂戴しましたが、今回は3年間の成果を総括しつつ、本学における今後の社会人リカレント教育を展望するご挨拶をいただきました。

続いて、報告会の前半では、学芸リカプロの受講者である塚田真理子さん、中島香矢さん、田川 衛さんの3人が、自身の研究や実践について報告

しました。自宅の庭先で小さなライブラリー兼ミュージアムを運営する塚田さん、北海道帝国大学を卒業したアマチュア画家・服部正夷の生涯を調査した中島さんの報告は、草の根レベルから地域文化を考えるうえでのヒントを与えてくれるものでした。田川さんは、学芸リカプロが主催して昨年10月に開催した企画展「DISTANCE #学びと距離の物語」（於北海道大学総合博物館）での経験を踏まえながら、アイヌ語研究者の知里真志保氏について報告しました。

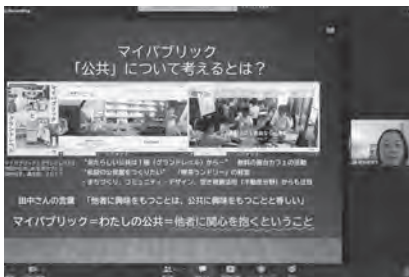
後半は、学芸リカプロの受講者がパネリストとして加わるシンポジウム「ミュージアムの誕生と成長」です。まず、学芸リカプロの代表を務めてきた文学研究院の佐々木亨教授から冒頭のご挨拶があり、本プログラムの3年間にわたる活動を振り返りながら、「学ぶよるこびに年齢は関係ないのではないか」という点をご指摘いただきました。その後、文学研究院の今村信隆特任准教授が司会を務め、具体的な議論へと入っていきます。

報告を行ったのは、開館から5年未満の新しいミュージアムで活躍する、4人の学芸員やキュレーターです。登壇順に、佐々木蓉子さん（弘前れんが

倉庫美術館）、蝦名未来さん（だて歴史文化ミュージアム）、金澤聡美さん（小樽芸術村）、樋泉綾子さん（札幌文化芸術交流センターSCARTS）が、それぞれの勤務館の特徴や最新の活動事例について報告しました。一見したところかなり事情が異なっているように思える4館ですが、報告を通じて、そこに共通するポイントが次第に見えてきます。コメンテーターとして参加した京都芸術大学の田中梨枝子准教授からは、4館がともに、人の暮らしの流れの中にあることが指摘されました。同じくコメンテーターの佐々木教授は、旧来の博物館の枠組みにとられない4館の機能の多様さについて指摘し、さらに、コレクションや設置・運営母体に関する質問をパネリストに投げかけていきました。各館の誕生や成長をめぐるディスカッションから



山本理事・副学長の挨拶



前半のプレゼンテーションでは3人の受講者が報告しました



代表として学芸リカプロを率いてきた佐々木亨教授



後半のシンポジウムでは4人のパネリストが登壇



若いミュージアムを動かす学芸員たちが活動を紹介します



コメンテーターの田中准教授



閉会の挨拶をする藤田文学研究院長

は、今後のミュージアムが進む方向という、より大きな問題も垣間見え、学芸リカプロの閉幕にふさわしい充実した議論が交わされたと言ってよいでしょう。

最後に、学芸リカプロを主催してきた文学研究院を代表して、藤田 健研究院長が挨拶を行いました。藤田研究院長からは、学芸リカプロの活動や文学研究院での社会人教育の現状と絡め

つつ、大学の社会的役割を改めて確認するという内容のお話をいただき、無事に閉会となりました。

(文学研究院)

公共政策大学院が「創立15周年記念オンラインイベント・同窓会」を開催

公共政策大学院（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）では、2月13日（土）、創立15周年記念オンラインイベントを開催しました。この会は、当初令和2年度早期の行事として企画していたところ、新型コロナウイルス感染拡大回避の観点から長らく繰り延べを余儀なくされ、Zoomを利用してこの日に開催する運びとなったものです。

イベント冒頭では、遠藤 乾院長による開会挨拶の後、吉見 宏理事・副学長よりご祝辞、佐々木隆生元院長・名誉教授より15年間の歩みを振り返るご挨拶をいただきました。

続いて、令和2年11月に公共政策大学院客員教授に就任された藻谷浩介

氏（日本総合研究所調査部主席研究員）から、「コロナ時代の地域経営」と題してコロナ禍における諸問題および人口成熟に向き合う今後の地方の対処等に関する記念講演をいただきました。

質疑応答のあとには、修了生を代表して小山里沙さん（2期生、平井デジタル改革担当大臣秘書官）、吉田勝利さん（4期生、環境省水・大気環境局大気環境課課長補佐）、吉 浩倫さん（11期生、野村證券株式会社名古屋駅前支店ウェルスパートナー課）、徐英雪さん（8期生、国家林业和草原局）に近況報告・メッセージをいただき、石井吉春 元院長・客員教授のご挨拶をもって公式プログラムを終了し

ました。

この日は、現在在籍中の教職員・学生のほか、創立当初からの修了生、離任された先生方等、全国・海外から100名を超える参加者を得ることができました。プログラム終了の後は、‘オンライン同窓会’にうつって夕刻まで各期の交流が続き、大変有意義かつ貴重な機会となりました。

諸所の制約下、ご多忙の中お話をいただきました吉見理事、藻谷教授はじめ、スピーカー各位、参加くださった皆様方には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

(公共政策学教育部・公共政策学連携研究部)



オンライン会議の参加者

令和3年度薬学実務実習開始セレモニーを挙

薬学部では、2月10日（水）に令和3年度薬学実務実習開始セレモニー「臨床現場へあがるための心得」を挙

行しました。この式は、薬学科学生が実務実習（病院実習・薬局実習）に臨むにあたり毎年実施しているもので、学生は、実習中のユニフォームとなる真新しい上下の白衣に身を包み、引き締まった面持ちで参加していました。

式には、佐藤美洋薬学部長、脇本敏

幸教務委員長、実務実習担当教員らが出席し、実務実習の趣旨や学生に期待すること、今年度実施された実務実習をふまえての注意点などとともに、激励の言葉が伝えられました。

受入施設からは、北海道大学病院薬剤部の菅原 満薬剤部長、株式会社アインファーマシーズの佐々木志織氏、株式会社ツルハの中村文哉氏、株式会社なの花北海道の井野千枝子氏が出席し、臨床の現場・患者さんに直接接す

る場で実習に臨む際の心構えなどが伝えられ、学生たちが神妙に聞き入る様子が見られました。

また、佐藤薬学部長から学生一人ひとりへ実習中着用するネームプレートが手渡され、病院・薬局合わせて5か月に及ぶ実習への壮行となりました。

（薬学研究院・薬学部）



激励の言葉をかける菅原薬剤部長



ネームプレートを手渡す佐藤薬学部長



熱心に聞き入る学生たち

北海道ワイン教育研究拠点設置に向けた 寄附講座「北海道ワインのヌーヴェルヴァーグ研究室」を開設

2月26日（金）、北海道庁本庁舎（北3西6）において、北海道ワイン教育研究拠点設置に向けた寄附講座「北海道ワインのヌーヴェルヴァーグ研究室」開設に係る共同記者発表を開催しました。

記者発表では、本学と寄附者との仲介役を担った北海道を代表して鈴木直道北海道知事から、道産ワインを取り巻く近年の状況や、寄附講座設置に寄せる期待について述べられました。続いて、本学を代表して寶金清博総長から、本寄附講座設置の背景、特にナパ・ヴァレーとカリフォルニア大学デービス校との強い地域連携に代表される、ワイン教育研究拠点の構築の必要性及び本学における位置付について、道内のワイン産業や農業への波及効果をもたらすことへの期待、寄附者への

謝意が述べられました。次いで、本学西邑隆徳農学研究院長より寄附講座「北海道ワインのヌーヴェルヴァーグ研究室」の概要について、設置は令和3年4月から令和6年3月までの3年間であり、兼任教授1名と特任准教授1名に加え、国内外から招へいした教員により教育研究を推進すること、教育・人材育成面では、道の委託事業である「北海道ワインアカデミー」のより一層の充実と本学学生向けの大学院共通講義の開講、オープンセミナーや食育プログラムの開催、社会人向けの「履修証明プログラム」の開設を目指すこと、研究面では教員の専門分野の先進的研究を展開し、招へい教員・学内外の研究者と連携した学際的・融合的研究プロジェクトの推進、主催シンポジウムの開催による先進的研究成果

の発信に取り組むこと、さらに、リーダー人材育成のためのワイン学位プログラムの開設、スマート農業など先進の技術を取り入れたワイン生産技術開発、ワイン生産者・研究者・消費者（市民）が交流できるカフェの設置などによる地域交流など、その教育研究拠点となる北海道ワイン教育研究センターの設置に向けた構想について説明が行われました。

寄附者からは、本寄附講座を通じた産学官連携により、観光事業や農業への波及、データベース構築によるマーケティング、流通の構築、食育などにより、北海道が名実ともにワインの銘醸地へなることへの期待のコメントが寄せられました。

（農学院・農学研究院・農学部）



寄附講座への期待を述べる鈴木北海道知事



本学を代表して寄附講座設置のコメントを述べる寶金総長



教育拠点構想について説明する西邑農学研究院長



会見後のフォトセッション

観光学高等研究センターがオンライン公開講座 「観光現場の挑戦」を開催

観光学高等研究センターでは、2020年度オンライン公開講座を12月1日（火）から全5回にわたって実施しました。

今回の公開講座で取り上げたテーマは「観光現場の挑戦」。

今日、観光は娯楽のほか、地域振興、文化交流、平和外交、外貨獲得などの多様な役割を担うようになりました。社会情勢と密接なつながりを強めていった観光は、同時に地域の課題、経済状況、自然災害、歴史問題、治安などの諸問題とも向き合っていくこととなります。本講座では、これまでに観光学高等研究センターが、研究や教育活動で一緒にしてきた観光の最前線でご活躍の皆様をゲストとしてお招きし、それぞれの「観光現場の挑戦」について、ホスト教員との対談も交えながらお話いただきました。

第一回目は、ゲストに小川 巖氏（エコ・ネットワーク代表）をお招きし、当センターの下休場千秋特任教授がホストとなって、市民環境団体エコ・ネットワークが取り組む「フットパス」の実践による歩く文化の普及啓発と市民による環境保全活動について

お話しいただきました。

第二回目は、桜庭佑輔氏（環境省東北地方環境事務所十和田八幡平国立公園管理事務所 みちのく潮風トレイル担当）と相澤久美氏（NPO法人みちのくトレイルクラブ 常務理事兼事務局長）をゲストにお迎えしました。木村 宏教授が聞き手となり、2011年に発生した東日本大震災からの復興事業の一環として始まったみちのく潮風トレイルづくりについて様々なお話を伺いました。

第三回目は、岡田真弓准教授が聞き手となり、ゲストの廣野 洋氏（阿寒アイヌコンサル 理事長）から、阿寒湖アイヌコタンで取り組まれてきた観光を通じたアイヌ文化の継承と経済的自立の両立にむけた挑戦について熱く語っていただきました。

第四回目は、ゲストに島田邦弘氏（埼玉県産業労働部観光課課長）と安藤彰紀氏（おおつちパラエティショー 実行委員会 企画プロデューサー）をお迎えし、山村高淑教授がホストとなって、両氏が取り組んできたコンテンツツーリズムを核とした地域おこしについてお話しいただきました。

第五回目は、石黒侑介准教授が聞き手となり、ゲストである佐藤 拓（株式会社ファイターズ スポーツ&エンターテイメント 事業統括本部コーポレート・ビジネス部 部長）から、2023年に北広島にオープンするボールパークに込める想い、日本ハムファイターズのスポーツエンターテイメントを通じたコミュニティづくりについてお話しいただきました。

2020年はまさに、コロナウイルスの感染拡大による世界的な移動制限により、観光現場が甚大な影響を受けた年でした。このような状況のなか、あらためて「人と人との交流の本質とは何か」、「観光の未来はいかにあるべきか」という観光の根幹に関わる問いがなされています。今回の連続公開講座にご登壇いただいたゲストの方々が取り組んできた課題、そしてご講演や対談の中で語っていただいた展望は、まさに先の問いを考えていく上で重要な示唆に富むものばかりでした。

（観光学高等研究センター）



第二回オンライン公開講座の様子



第四回オンライン公開講座の様子

令和2年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、1月28日（木）に、本学及び道内外の各大学の技術職員を対象とした令和2年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修（オンライン研修）を開催しました。本研修は、職務に関する専門的知識・技術等を広く習得させることや技術職員間の交流を目的に毎年開催しており、今回は、「コロナ禍における教育研究支援と施設管理業務」をテーマに、情報交換及び講義を行いました。オンラインでの開催は初めての試みでしたが、34名（うち他大学からは、帯広畜産大学2名、神戸大学3名、鳥取大学2名、琉球大学1名）の参加がありました。

当日、午前の部では、初めに、本センター生物生産研究農場・星野洋一郎教授による「センター将来構想につい

て」の講義を行いました。次に、「コロナ禍における教育研究支援と施設管理業務について～各施設からの報告～」として、7施設（生物生産研究農場、植物園、白尻水産実験所、帯広畜産大学畜産フィールド科学センター、神戸大学大学院農学研究科附属食資源教育研究センター、鳥取大学農学部附属フィールドサイエンスセンター、琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター）からコロナ禍における業務体制等にかかる報告があり、その後、総合討論を含めた情報交換を行いました。午後の部では、農学研究院の柏木淳一講師による「世界のコムギ生産と環境ストレス耐性」、ホクレン農業協同組合連合会農業総合研究所営農支援センター訓子府実証農場の篠原禎忠農場長による「ホクレン訓子府実証農場の取り組み」、函館国

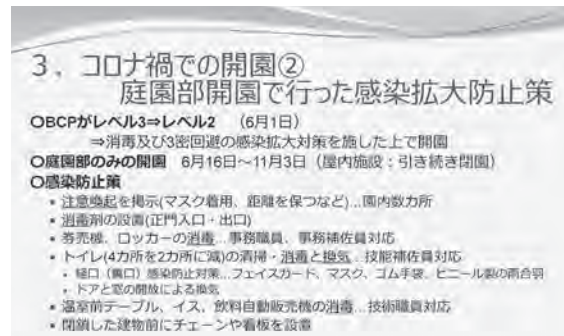
際水産・海洋都市推進機構函館頭足類科学研究所の桜井泰憲所長（本学名誉教授）による「海洋環境変化に应答する水産資源の動向：これに適應する漁業とは？」という3つの講義を行いました。

オンラインでの開催に伴い、事前に想定できなかったアクシデントもあった一方で、オンラインだからこそ参加できた職員もおり、大変貴重な研修となりました。参加者からの意見を踏まえ、今後の研修のあり方について模索していけたらと考えています。開催にあたりご指導・ご協力・ご講演いただいた関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



琉球大学・屋良朝宣氏の報告より



本センター植物園・持田 大氏の報告より

先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2020」を開催

先端生命科学研究院では2月15日（月）にZoomで令和2年度FDSD研修会「総会2020」を開催しました。今年度も教育・研究担当の全教員及び研究室の事務・技術職員、並びに理学・生命科学事務部職員を対象とし、同研究院の諸研究・教育活動報告とともに、新型コロナウイルス対策やコロナ禍で生じた業務改善などについて報告を実施しました（出席者総数91名（研究院等教職員60名、事務部31名））。

今年度のプログラムは2部構成で（1）研究・教育・教育支援環境（2）教えて！理学・生命科学事務部の活動について報告が行われました。

プログラム（1）の、研究推進関連では、新型コロナウイルス感染症対策、部局URAの設置による研究力強化、研究推進支援室の業務効率化、GI-CoREの内在化、次年度へむけての方針・目標について、門出健次研究院長から説明がありました。教育改革関連では、オンライン授業対策やコロナ禍における対面授業実施への感染防止対策、コミュニケーション環境整備等、

また博士後期課程進学率向上や留学生入学への取組等について、出村 誠学科長、芳賀 永コース長から紹介がありました。

プログラム（2）では、理学・生命科学事務部の人事担当、会計担当、研究協力担当、外部資金担当、営繕担当、教務担当、大学院教育担当の若手事務職員より、コロナ禍での事務作業における問題や改善点、また今後の課題などを中心に業務担当の紹介がありました。

今年度は、新型コロナウイルス対策に追われ、教員や職員、学生においても在宅勤務や事務手続きの変更等、大きな変化を求められた、試行錯誤の1年でした。初めてのオンライン開催となった総会は、遠路からの参加も可能で、参加しやすい雰囲気ともなり、様々な工夫や取組を教員・事務職員双方が紹介・学ぶことができ、今後の改革につなげられる情報共有の場となった有意義な時間となりました。

（生命科学院・先端生命科学研究院）



研究院長、学科長、コース長の発表時の様子

寶金総長と先端生命科学研究院所属教職員との意見交換会を開催

2月15日（月）に寶金清博総長を理学部にお招きし、感染防止対策を実施の上、総長による方針表明と意見交換会を開催しました。当日は先端生命科学研究院教員24名、事務部職員13名が出席の中、総長から本学の現状と今後

の目標について講演が行われました。寶金総長は、本学が社会との連携をリードする比類なき大学を目標に、「再生」と「発展」にむけた6つの方針を掲げられています。教職員に対しては、今こそ本学の基本理念である「フ

ロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」を反芻すると共に、総長方針への理解を期待する旨述べられました。

（先端生命科学研究院）



寶金総長講演風景



三密を避けた会場で意見交換

寶金総長と理学研究院所属教職員との意見交換会を開催

2月26日（金）に寶金清博総長と理学研究院所属教員・事務職員との意見交換会を開催しました。本意見交換会は新型コロナウイルス感染症対策のためZoomを利用したオンライン形式で

開催し、60名近くの教員・事務職員が参加の中、約1時間にわたり実施されました。

当日は、事前に教職員から送られた質問に対して寶金総長から回答が行わ

れた後、引き続き本学の学部教育等に関して活発な意見交換が行われ、大変意義のある会となりました。

（理学研究院）



理学部大会議室から意見交換会に参加する堀口健雄理学研究院長



閉会挨拶を行う網塚 浩理学院長

■ 定年を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年を迎える方々のお言葉と略歴を紹介します。

地球環境科学研究科教授

くぼかわ あつし
久保川 厚 氏



大学院地球環境科学研究科設置1年後の1994年に、同研究科の4番目の専攻として大気海洋圏環境科学専攻が設置され、学会の重鎮から若手までの、私を含む8名の教員が国内外各地から赴任してきました。まだ建物もなかったもので、この8名は旧病院の1フロアに研究室を構えました。何の柵もなく全てを一から組み上げられる新しいグループで、全員平等な一人研究室体制と学部を持たない大学院に最適化した共同教育体制の構築など、楽しく得難い経験をさせて頂きました。専攻の設置にご尽力下さり、かつ、その後を任せて下さった皆様に感謝致します。

あれからもう27年になります。最初の8名の内、私より若い人たちは早くに新天地へと旅立ち、今も残るのは私だけとなりました。この27年間、学問を取り巻く環境なども大きく変わってきてはいますが、私自身は、昔と変わらず、好きなことを好きなように教育・研究し、幸福な日々を過ごさせて頂きました。定年に際して思うのは、北大に來られたことも含め、自分がどれほど幸運だったかということと、多くの人たちに助けられ支えられてきたという事実です。この場を借りて御礼申し上げます。

略 歴

生年月日	昭和32年5月25日
昭和56年3月	東北大学理学部卒業
昭和58年3月	東北大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程前期課程修了
昭和60年3月	東北大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程後期課程中退
昭和60年3月	東北大学理学部助手
昭和63年6月	理学博士(東北大学)
平成2年4月	九州大学大学院総合理工学研究科助教
平成6年4月	北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成17年4月	北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成23年4月	北海道大学大学院地球環境科学研究科 副研究科長・環境科学院副院長
平成25年9月	
平成25年10月	北海道大学大学院地球環境科学研究科 研究科長・環境科学院長
平成29年9月	

理学研究院教授

かとう あつし
加藤 敦之 氏



北海道、そして北海道大学に憧れて本州から入学。1年半後に、これも漠然とした憧れで理学部に進学しました。その後40年以上にわたりきわめて恵まれた環境で過ごさせて頂き、大変感謝しております。本来外部での経験を積むべきであったとは思いますが、残念ながらその積極性もしくは能力が無かったのかもしれませんが。思い返せば、大学院進学時・博士進学時・就職時そしてその後も色々な選択の機会がありました。この選択で良かったかとの思いがある一方、どの選択が正しかったかということはわからず、選択した路でがんばっていくしかないと考えてきました。その結果、幸せな生活を過ごさせて頂いたと思っています。

長い大学生活で大した成果をあげることができないまま時間が過ぎたことには忸怩たる思いもありますが、残り2年の特任教員としての生活で少しでもこれまでの大学生活をまとめることができればと思っています。長きにわたりお世話になりました全ての方に感謝いたしますとともに、北海道大学と皆様のますますのご活躍とご発展をお祈り申し上げます。

略 歴

生年月日	昭和32年11月18日
昭和55年3月	北海道大学理学部卒業
昭和57年3月	北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和60年3月	北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了
昭和60年3月	理学博士(北海道大学)
昭和60年4月	北海道大学理学部助手
平成元年10月	北海道大学理学部講師
平成3年7月	北海道大学理学部助教授
平成7年4月	北海道大学大学院理学研究科助教授
平成14年4月	北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年4月	北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

よもぎだ きよし
蓬田 清 氏

北海道大学に着任して20年以上が経ち、この度、無事に退職を迎えることになりました。札幌にも北大にもそれまで何の縁もない私でしたが、公私ともに充実かつ楽しい日々を過ごさせていただきました。風土・大学の魅力以上に、教員・事務の皆様のご協力とお心添えの賜物であり、感謝の念を心よりお伝えいたします。意欲ある学生にも恵まれ、自分の方がかえって成長させていただいた感が強く、本当にありがたく思います。

研究柄、在任中で特に思い出されるのは、2000年有珠山噴火と2011年東北沖地震です。有珠山では兆候が現れるとすぐに、役に立たないのに使命感のような気持ちで現地へ赴き観測を始めた途端、噴火の知らせに慌てて逃避しました。東北沖地震の際には学術誌の編集長だったので、直ちに特別号を企画しました。幸い国内外から多くの重要な投稿があり、世界に先駆けてまとまった研究成果の出版に結実しました。

これからも少しだけ、特任教員として北大に勤務予定です。皆さんに迷惑をかけないように、残りの日々の勤めを心がけたいと思います。

略 歴

昭和55年 3月 東京大学理学部卒業
昭和57年 3月 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
昭和60年 10月 マサチューセッツ工科大学地球大気及び惑星科学科博士課程修了
昭和61年 2月 Ph.D (マサチューセッツ工科大学)
昭和62年 1月 スタンフォード大学地球物理学科Assistant Professor
平成 2年 1月 広島大学理学部助教授
平成10年 4月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授

農学研究院教授

ありが さなえ
有賀 早苗 氏

平成のすべてと令和の始まりの思いがけず長い年月を北大で過ごさせていただきました。初夏の緑、雪景色、目を見張る美しいキャンパスで、生命の不思議の一端を発見するワクワク、学生の驚くような成長を見るワクワクをたくさん味わい、様々な学びを得たことに感謝しています。その間には落胆・反省するところも多々ありますが、よりよい研究・教育をと真摯に努めてきました。医療技術短期大学部から医学部保健学科への改組、女性研究者支援室（当時）の開設、国際食資源学院の新設など、自身の研究・教育以外の業務にもいくつか関わることになり、卒業生でも道内出身者でもない“よそ者”の私を受け入れ居場所を与えてくれた北大のために働こうと、私なりに力を尽くしましたが、非力を顧みない取り組みは、今思えば随分な思い上がりであったと思います。腐心を重ねて創立に至った学内保育園や種々の支援制度等が定着し、今では当たり前のように多くの教職員・学生に利用されていることは大きな喜びです。コロナ禍で学生のいない教室・キャンパスの寂しさを味わい、改めて大学は学生がいてこそその学び舎であることを感じています。

略 歴

昭和55年 3月 上智大学理工学部化学科卒業
昭和57年 3月 上智大学大学院理工学研究科化学専攻修士課程修了
昭和61年 3月 東京大学大学院医学系研究科博士課程修了 (医学博士)
昭和61年 4月 東京大学医科学研究所助手
昭和62年 10月 スイスチューリッヒ大学分子生物研究所博士研究員
平成 1年 4月 日本学術振興会特別研究員 (北海道大学薬学部)
平成 2年 4月 北海道大学薬学部助手
平成 3年 4月 北海道大学医療技術短期大学講師
平成 4年 12月 北海道大学医療技術短期大学助教授
平成 8年 8月 北海道大学医療技術短期大学教授
平成15年 10月 北海道大学農学部教授
平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究院教授

先端生命科学研究院教授

こうだ としあき
幸田 敏明 氏



昭和51年に入学してから、留学等の時期を除き実質43年ほど北海道大学にお世話になりました。入学した頃に免疫グロブリン遺伝子の再構成が明らかとなり、個体内で遺伝子が増えることに衝撃を受けて、その後の私の進路が方向づけられました。大学院で癌遺伝子の研究を始めて以来、分子生物学の進歩とともに遺伝子の研究を続けてきましたが、この間、様々な技術の利用に伴い、それを管理する仕事にも携わることになりました。放射性同位元素や、動物実験、遺伝子組換え実験の全学委員会に関わり、特に放射線と遺伝子に関しては、委員長の大役も担わせていただきました。終盤に携わった遺伝子組換えの委員長としては、ゲノム編集の法規制の変更に対しても何とか対応できたと考えています。最後の1年は新型コロナの影響で、ほとんど仕事をできずに慌しく委員長を終えることになったのが少し残念です。

最後になりますが、私を育ててくれた北海道大学、お世話になりました教職員の皆様、研究室のスタッフ及び学生に感謝いたします。また、ポストゲノムRI施設及び動物施設、創成研究機構プラットフォーム動物施設の運営にお力添えをいただいた皆様に感謝いたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年2月2日
 昭和57年3月 北海道大学医学部医学科卒業
 昭和63年6月 医学博士（北海道大学）
 昭和59年5月 北海道大学免疫科学研究所助手
 昭和63年7月 } スクイブ医学研究所（アメリカ）
 平成2年6月 }
 平成2年8月 北海道大学免疫科学研究所助手
 平成12年3月 北海道大学免疫科学研究所助教授
 平成15年6月 北海道大学大学院理学研究科教授
 平成18年4月 北海道大学大学院先端生命科学研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院教授

きたむら みちお
北村 倫夫 氏



これまでの私の社会人人生のフィールドは、大きく2つから成ります。「民」の野村総合研究所、「学」の北海道大学です。両者は全く異なりますが、各々での経験や知識を相互に活かすことができたことはとても幸運でした。野村総研（36年間勤務）では、国・自治体・企業等からの受託調査研究に従事し、政策立案、公共経営、事業構想等の実務的な経験と知識を得ることができました。

母校北大とのご縁は、現在のメディア・コミュニケーション研究院に客員教員として招かれたこと（H14）に始まります。以後15年間、自治体の広報戦略や観光事業構想等の立案を演習授業で行ない、その成果を学生とともに自治体等へ「政策提言」してきました。また、新渡戸カレッジの初代フェローとして、実務経験を活かしたグローバルリーダー論、キャリア開発論等を学生に伝えることもできました。さらに、平成29年3月より北大に正教員として奉職させていただき、教育の機会に加えて、観光マーケティング領域での研究およびその成果の社会実装機会を得ることができました。このように、実務経験とアカデミック経験をうまく融合できたことに満足感を抱きながら、無事に定年を迎えます。

最後に、民間出身の私を温かく受け入れていただいた北海道大学ならびに教職員の皆様に心より御礼申し上げるとともに、北大のさらなる発展を祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和32年7月4日
 昭和56年3月 北海道大学経済学部経営学科 卒業
 昭和56年4月 } 民間（株式会社野村総合研究所）
 平成29年2月 }
 平成14年4月 北海道大学大学院国際広報メディア研究科
 大学院連携分野教員（客員助教授）
 平成17年4月 北海道大学大学院国際広報メディア研究科
 大学院連携分野教員（客員教授）
 平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
 大学院連携分野教員（客員教授）
 平成25年5月 } 北海道大学新渡戸カレッジフェロー
 平成29年2月 }
 平成29年3月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院
教授はしもと さとし
橋本 聡 氏

赴任したのは1987年4月でした。札幌に到着したのはみぞれまじりの夕刻で、東京から来た私はまだ雪の残る街角に驚きながらも、採用されたことが心底うれしく、誇らしい気持ちで一杯でした。

北大での私の任務は、初習外国語ドイツ語の担当でした。やがてそこにチェコ語の担当が加わりました。私は人生の上で、冷戦時代の旧チェコスロヴァキアで学んだことを糧としてきましたので、これはうれしい任務の追加でした。もともとドイツ語史研究が専門なのに、留学先としてプラハを選んだきっかけも北大にありました。学生時代の1981年、北大で行われたドイツ語史のワークショップに学外から参加し、講師として招かれていたカレル大の先生を師と定め、翌年からプラハで学ぶことを決めたからです。冷戦最中の頃でした。

北大に在籍した34年間、世界は大きく変化しました。なかでもヨーロッパの変化が私の関心事でした。冷戦の終結とEUの東方拡大、様々な局面で語られる統合理念の成否などです。20年ほど前に設立された独立大学院では、そうしたことを言語・文化・教育の観点から見極めることに努めました。最近は留学生が増え、日本研究の要素を加味し、1968年や1989年の意味を改めて検討する機会も得ました。

こうしたことすべてが北大からもらったチャンスでありプレゼントだったと、心から感謝しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和32年 8月22日
 昭和55年 3月 学習院大学文学部ドイツ文学科 卒業
 昭和60年 3月 学習院大学大学院人文科学研究科ドイツ文学専攻
 博士課程前期課程修了
 昭和62年 3月 学習院大学大学院人文科学研究科ドイツ文学専攻
 博士課程後期課程退学
 昭和62年 4月 北海道大学言語文化部講師
 平成 4年 4月 北海道大学言語文化部助教授
 平成12年 4月 北海道大学大学院国際広報メディア研究科助教授
 平成19年 4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授
 平成21年 9月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

工学研究院教授

あずみ かずひさ
安住 和久 氏

小生は応用化学科学士課程で電気化学と金属腐食科学を研究する理学第二講座に配属され、分光偏光解析法により鉄表面に存在する厚さわずか数nmの酸化物皮膜の光学物性を評価する仕事に従事し、これがその後の研究スタイルの基礎となりました。

卒業後は大学院、助手と、幸運と多くの先人に引き上げていただき大学教員となることができました。1992年から一年半、米国スタンフォード大学に滞在しましたが、シリコンバレーの中心でインターネット萌芽期を体験できたことは、研究以外でも大変刺激にみちたものでした。米国ではめっき関連の研究に従事しましたが、このテーマはその後の研究柱の一つとなり、小生の論文を見た何人かの留学生が小生の研究室で学位を取得していきました。また多くの企業や研究機関と共同研究の機会を頂き、日本の産業に微力ながら寄与できたように思えます。

さて、残り少ない在任期間でなにかしら北海道らしい研究成果を残すべきとの思いから、近年は世界的にも研究例の少ない氷結環境での金属腐食現象の解明に取り組んでいます。また北海道百年記念塔の腐食環境評価プロジェクトに加えていただき、塔内にセンサーネットワークを設置して年間計測を行なっております。特任教員として許された期間を最大限に活かして、自分の頂いた恩を後進に渡すべく最後まで努力したいと考えています。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年 2月12日
 昭和56年 3月 北海道大学工学部卒業
 昭和58年 3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 平成 2年 3月 工学博士（北海道大学）
 昭和60年 7月 北海道大学工学部助手
 平成 4年 8月 米国スタンフォード大学客員研究員
 平成 6年 6月 北海道大学工学部助教授
 平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授
 平成19年 4月 北海道大学大学院工学研究科准教授
 平成20年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

文学研究院教授

たけだ まさや
武田 雅哉 氏



むかしむかし、いろんなことが、まだテキトーに行なわれていた時代に、なんとなく北大の教員になって、地に足を着けることなくボーッと生きていたら、とうとうこの日を迎えてしまいました。

専門としている中国文学の世界には、いまもって、なんの貢献もできないままですが、たぶんぼくは、モノとしての本を作るのが楽しくて、今までやってきたんだと思います。ときに一人で書き下ろし、ときに友人たちと、原稿を読みあいながら論集や雑誌を編む。あとは、むかしの中国人が書いたものを学生たちと読み、オモシロイところをあれこれ語り合うだけという田舎教師の日々を通してきました。まさに、陶淵明の「移居」にある、「奇文、共に欣賞し 疑義、相興に析く」（おもしろい文があれば、ともに味わい、わからない言葉があれば、頭を寄せあって研究しよう）だけが、ぼくのなすべきお仕事でして、それ以外は手を抜き、サボってきました。ごめんなさい。

学生たちに求め、自分にも課してきたことは、「忙しくない」こと。大声で発言することより、小さな声の人の話をちゃんと聞くこと。だれもが「正しい」と叫んでいることは、とりあえず疑ってみること。日光よりも、月光のもとで読書をする事。

そんな夜行性のぼくと、朝まで遊んでくれた、学生諸君と同僚・職員のみなさんには、感謝のことばしかありません。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年1月8日
 昭和60年3月 北海道大学文学部卒業
 昭和63年3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了
 昭和63年3月 文学修士（北海道大学）
 平成元年3月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程退学
 平成元年4月 北海道大学文学部助手
 平成4年4月 北海道大学文学部助教授
 平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科助教授
 平成12年6月 北海道大学大学院文学研究科教授
 平成31年4月 北海道大学大学院文学研究院教授

工学研究院准教授

こいずみ ひとし
小泉 均 氏



博士後期課程3年目の1984年9月に大学院を中退し、10月から工学部助手として着任しました。3月末でそれから36年6月になります。学生時代は励起希ガス原子の反応速度や有機分子の光吸収および光イオン化断面積の測定など気相での現象についての研究を主に行っていましたが、北海道大学では有機分子や高分子のフリーラジカルやイオンの凝縮相での現象についての研究を主にすることになりました。学生のときの研究室もこちらの研究室も同じ学会に所属する物理化学系の研究室でしたが、いろいろな面で異なりました。研究対象や手段が違うということだけでなく、どういう研究を良い研究と考えるかという根本的な部分にも違いがあるように感じました。最初は何をどういふうに研究すれば良いか悩むことも多かったです。しだいに異なる分野の知識や考え方が融合し、それぞれの分野だけの専門家では見えない部分も見えるようになってきたと自負しています。

今年度末で定年となりますが、あと2年間特任教員としてお世話になります。若い方の足を引っ張らないように、自分なりの役目を果たせたらと思っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和32年4月19日
 昭和55年3月 東京工業大学理学部化学科卒業
 昭和57年3月 東京工業大学大学院理工学研究科化学専攻修士課程修了
 昭和59年4月 } 日本学術振興会博士課程奨励研究員
 昭和59年9月 }
 昭和59年9月 東京工業大学大学院理工学研究科化学専攻博士後期課程中退
 昭和59年10月 北海道大学工学部助手
 昭和63年6月 理学博士（東京工業大学）
 平成2年10月 }
 平成3年9月 } バルリン ハーン・マイトナー研究所客員科学者
 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助手
 平成9年10月 北海道大学大学院工学研究科助教授
 平成19年4月 北海道大学大学院工学研究科准教授
 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院准教授

国際部長

おた ゆみ 氏
太田 裕美 氏



昭和58年6月に釧路工業高等学校に採用いただき、昭和59年12月に旭川医科大学へ異動、平成4年4月からは北海道大学にお世話になり、この3月で定年を迎えることになりました。

大学卒業当時は大卒女子の就職はなかなか厳しい状況でしたが、幸いにも釧路高専からお声をかけていただき、縁もゆかりもない釧路の地へ赴任したのが懐かしく思い出されます。

次の旭川医大は開学10周年を迎えたばかりの若い大学で、これから大学を発展させていこうという活気にあふれた雰囲気でした。職員の中には創設のために北大から異動された方も多く、ここでのご縁が北大へとつながることになりました。

北大では事務局や部局などいろいろなお仕事をさせていただきましたが、どこでも釧路高専や旭川医大を経験された職員の方がいらっしゃって、助けていただくことが多々ありました。

無事定年まで勤めることができましたのは、多くの皆様に支えていただいたおかげと心より感謝申し上げます。最後になりますが、北海道大学の益々の発展を祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

長い間お世話になり、誠にありがとうございました。

略 歴

生年月日	昭和35年
昭和58年6月	釧路工業高等専門学校
昭和59年12月	旭川医科大学
平成4年4月	北海道大学
平成12年4月	北海道大学総務部総務課専門職員
平成14年4月	北海道大学学務部留学生課専門職員
平成16年4月	北海道大学学術国際部留学生交流課留学生交流掛長
平成17年4月	北海道大学医療技術短期学部庶務係長
平成18年4月	北海道大学医学事務部事務課庶務第二係長
平成18年7月	北海道大学学術国際部国際企画課国際企画係長
平成21年4月	北海道大学学術国際部国際企画課課長補佐
平成22年7月	北海道大学国際本部国際連携課課長補佐
平成23年4月	北海道大学総務企画部総務課課長補佐
平成26年4月	北海道大学工学系事務部総務課長
平成30年4月	北海道大学学務部キャリア支援課長
平成30年7月	北海道大学国際部国際企画課長
令和元年7月	北海道大学国際部国際部長

法学研究科・法学部事務長

とくやま まさかず 氏
徳山 雅一 氏



北海道大学には19年間勤務いたしました。現在の心境は、無事に定年までたどり着くことができたという安堵感に満ちています。

仕事は庶務・学生生活支援・教務・入試・国際交流・研究協力・会計と様々な業務に携わりましたが、なかでも法人化移行業務、第50回全国七大学総合体育大会の開催、キャリアセンター「企業研究セミナー」の充実、放送大学学園当時の大学院設置の立上げが、特に印象に残っています。一方で、平成28年のキャリアセンターにおける歴史的事案、そのほか数々の難しい事案に遭遇し、幾度か絶体絶命の危機を経験しましたが、何とか乗り切ることができ本日に至っております。

これもひとえに、多くの先輩方や同僚の皆さま方、多くの先生方に支えられたお陰であると、今は感謝の気持ちで一杯です。この場におきまして、心から御礼申し上げます。そして、多くの職員の方の皆さま方、多くの学生さんとも出会えたことは、私にとって大きな宝物になっています。

数年前から、休日に音楽鑑賞やストレッチ体操を行い、老化・劣化の防止に努めています。令和3年4月以降も引き続き勤務し、北海道大学の発展に微力ながら貢献したいと新たな決意をみなぎらせていますので、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

略 歴

生年月日	昭和36年1月25日
昭和58年3月	弘前大学人文学部卒業
昭和58年4月	} 苫小牧信用金庫
平成元年8月	
平成元年12月	室蘭工業大学会計課
平成4年4月	室蘭工業大学庶務課
平成9年4月	北海道大学学務部教務課
平成11年4月	放送大学学園教務部教務課係長
平成14年4月	北海道大学工学研究科・工学部教務課専門職員
平成14年8月	北海道大学総務部企画室専門職員（法人移行準備事務室勤務）
平成16年4月	北海道大学企画部企画調整課掛長
平成17年4月	北海道大学学務部学生支援課係長
平成19年4月	苫小牧工業高等専門学校学生課課長補佐
平成21年4月	北海道大学学務部学生支援課課長補佐
平成24年4月	北海道大学学務部キャリアセンター課長
平成28年4月	北海道大学環境科学事務部事務長
平成31年4月	北海道大学法学研究科・法学部事務長

環境科学事務部事務長

ながの つよし
長野 剛志 氏



昭和54年、本学に採用となり、音威子府村から札幌市に赴任して42年経過しました。

昭和の時代は、大学職員のほとんどが常勤で人数が多く、今よりゆとりをもって仕事ができたと感じます。最初はソロバンから電卓への移行時期で、ワープロが登場するまでは原議書はデスクペンで手書き、書類はこよりや綴紐で綴じていました。また、20代までは、毎朝、勤務前に係内の机拭き、灰皿洗い、お茶くみをし、アフター5には酒場をはしごし、クセのある先輩方に絡まれながらも飲みニケーションに励み、今の忍耐力が養われました。

次の平成は、変革の時代でした。大学職員の定員削減が進められるとともに、国立大学の法人化が行われ、各種業務が大学共通の汎用システムから独自システム・外注等への移行が必要となり、対応に悪戦苦闘しました。個人的には、学外への転勤が3度あり貴重な経験となりました。

そして令和はコロナの時代であり、場所を問わずソーシャルディスタンスが求められ、職場での飲み会も皆無となりました。因みに、家庭内では10年前からセーフティディスタンスを維持しており、対策は万全です。

最後に、これまで支えてくださった皆様方に心よりお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和36年 1月22日
- 昭和59年 3月 北海学園大学法学部卒業
- 昭和54年 8月 北海道大学医学部附属病院
- 昭和57年 5月 北海道大学
- 平成 5年 4月 国立日高少年自然の家
- 平成 8年 4月 北海道大学医学部附属病院
- 平成11年 4月 メディア教育開発センター管理部会計課総務係長
- 平成14年 4月 北海道大学経理部経理課給与掛長
- 平成16年 4月 北海道大学総務部人事課給与管理掛長
- 平成18年 4月 北海道大学総務部人事課給与第三係長
- 平成19年 4月 小樽商科大学財務課課長補佐
- 平成20年 4月 小樽商科大学財務課課長代理
- 平成21年12月 北海道大学工学系事務部経理課課長補佐
- 平成24年 4月 北海道大学財務部経理課課長補佐
- 平成25年 4月 北海道大学医学系事務部会計課長
- 平成28年 4月 北海道大学北キャンパス合同事務部事務長
- 平成31年 4月 北海道大学環境科学事務部事務長

北方生物圏フィールド科学センター事務長

なりさわ あきひさ
成澤 顕久 氏



昭和58年の採用以来、平成、令和を経て38年が過ぎました。この間、文部省併任、他大学や高専への出向を含め学内外をまんべんなく経験しました。平成16年には国立大学法人化に向けた本学給与規程、退職手当規程の作成に携わり、連日連夜、事務局長室で倦怠感に襲われながら打合せを行ったことが思い出されます。また、3年前には初の入院。開胸手術と開腹手術を受けました。健康であってこそこの日常。これを機にあらためて気づかされました。

今は一億総活躍社会といわれ、再雇用で働き続けることを考えると定年退職の実感が湧きませんが、今後は健康に留意しつつ嘱託職員として微力を尽くしたいと考えています。ひと区切りを迎えるにあたり、これまで支えていただいた多くの同僚、後輩職員に感謝申し上げますとともに、益々のご活躍を祈念いたします。

略 歴

- 昭和58年 4月 北海道大学
- 昭和60年 4月 官房人事課給与班
- 昭和61年 4月 北海道大学
- 平成11年 4月 帯広畜産大学庶務課人事係長
- 平成14年 4月 北海道大学総務部人事課給与掛長
- 平成16年 4月 北海道大学総務部人事課給与計画掛長
- 平成18年 4月 北海道大学総務部人事課人事第一係長
- 平成18年10月 小樽商科大学総務課課長補佐
- 平成20年 4月 北海道大学総務部人事課課長補佐
- 平成22年 4月 苫小牧工業高等専門学校総務課長
- 平成24年 4月 北海道大学医学系事務部総務課長
- 平成27年 4月 北海道大学法学研究科・法学部事務長
- 平成31年 4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター事務長

北キャンパス合同事務部
事務長ささはら ひであき
笹原 英明 氏

定年退職は自分にとっては、まだまだ先のことと思いき勤務してまいりましたが、こうして自分が迎えることになり、年月の経過の早さを感じております。

振り返って見ますと、昭和55年4月に本学に採用となり、41年の勤務期間で函館、釧路、苫小牧での勤務も経験させていただき、それぞれの勤務地での懐かしい思い出が甦ってきます。何とか無事に節目を迎えられたのも、その時々でいただきました、多くの方々からのご指導とご支援があつてのことで、心から感謝を申し上げる次第です。

最後になりますが、北海道大学の更なる発展と皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げ、挨拶とさせていただきます。お世話になりありがとうございました。

略 歴

昭和55年4月 北海道大学
 平成13年4月 釧路工業高等専門学校庶務課人事係長
 平成16年10月 国際広報メディア研究科・言語文化部総務係長
 平成19年4月 メディア・観光学事務部係長
 平成20年7月 苫小牧工業高等専門学校総務課課長補佐
 平成22年7月 学術部産学連携・研究推進課課長補佐
 平成23年4月 研究推進部産学連携課課長補佐
 平成24年4月 北海道大学病院総務課課長補佐
 平成27年4月 理学・生命科学事務部事務課課長補佐
 平成29年4月 経済学事務部事務長
 平成31年4月 北キャンパス合同事務部事務長

■ 諸会議の開催状況

役員会（令和3年2月8日）

議案・クロスアポイントメントの適用について

協議事項・北海道及び読売新聞社北海道支社との包括連携協定について

- ・旅費支給における宿泊料の一部見直しについて

- ・全学運用教員の措置について

- ・自己啓発休業制度の新設について

- ・就業規則関連規程の一部改正について

報告事項・脱炭素化目標実現のための大学の「気候変動コアリッション」（仮称）について

- ・令和3年度客観・共通指標等による評価結果及び運営費交付金等（予定額）

教育研究評議会（令和3年2月24日）

議題・北海道及び読売新聞社北海道支社との包括連携協定について

報告事項・令和2年度運営費交付金の追加配分等について

- ・令和3年度客観・共通指標等による評価結果及び運営費交付金等（予定額）について

- ・「カーボン・ニュートラル達成に貢献する大学コアリッション」（仮称）について

役員会（令和3年2月26日）

議案・北海道及び読売新聞社北海道支社との包括連携協定について

- ・令和2年度内部統制システムモニタリング結果について

- ・国立大学法人ガバナンス・コードにかかる適合状況の報告について

- ・共同プロジェクト拠点に係る認定について

協議事項・北海道、札幌市、株式会社ニトリホールディングスとの連携協定について

- ・共同利用・共同研究拠点の認定申請について

報告事項・時間外労働実績について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しています。

■ 人事

令和3年2月13日付発令

新職名（発令事項）	氏名	旧職名（現職名）
【教授】 （辞職）	中園和貴	大学院公共政策学連携研究部附属公共政策学研究センター教授

編集メモ

- 北海道大学一般入試の前期日程，後期日程が全て終了しました。昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響

を受け，中止となった後期日程も，今年度は無事に終えることができました。



入口には消毒用アルコールが置かれ，受験生は手指をシュッと消毒してから試験室へと向かいました。



入場列に並ぶ受験生。マスクで半分隠れた顔からも緊張の色が伺えます。

裏表紙メモ

北海道大学のキャンパスの風景を様々な角度からご紹介する「キャンパス風景」。

3月号はひそやかに芽吹く準備をはじめた「春」の風景です。本州では桜が開花したという話題を耳にしますが，北海道の「春」はまだまだゆっくりと芽吹き準備をしているようです。長年活躍してくださった教職員や巣立っていった卒業生たちが次のステージで花開くそのころに，きっとキャンパスの花も綺麗に咲いて皆さまの活躍を遠くから見守っていますよ。

キャンパス風景 12 事務局（北8条西5丁目）



北大時報 ③ No.804 令和3年3月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2162 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>